

329
671

自然醫學としての神道

祝詞の生理學

櫻澤如一著



始



時230
623

櫻澤如一著

自然醫學としての神道

祝詞の生理學

食養會



扉のことば

私は完全なる「専門家」(片輪)であるより、ボンヤリした「素人」(人間)であることを望む。

私は學者でなく學生であり、狭い谷底の様な學術の専門の世界に棲息するより廣々とした大自然の野原に草を摘んだり、走つたり、ねころんだり、耕したりする人間と云ふ動物の自由、奔放な生活を好む。

私はしきしまの國民として、しきしまの道(詩歌の世界——神人一如、歸一の生活)を生きたい。

私は素人であることの権利だけは何事につけても失ひたくない。従つて私の神道の見方は全く門外漢のそれである。本書は専門の神道家の校訂を受けてゐないから、ずい分滑稽な思ひ違ひや、重大な間違ひを犯してゐるかも知し

れない。その點は伏して大方の御示教を願ひ上げる。

治療醫學は完成すれば豫防醫學に進まねばならない。

豫防醫學は醫學の無用を理想とせねばならない。即ちそれは平凡で、容易で完全で自然な健康法、不老長壽法でなくてはなるまい。それを私は自然醫學と呼びたい、そんな自然醫學は、もう醫學としての臭氣を脱してゐる筈である。

神道は古色蒼然たる原始的な體様をもつてゐるが、生理學的に見るとこれこそ完全な自然醫學であると私は思ふ。

神道は國民の精神と肉體を同時に救済するものであると私は斷言しよう。それは國民の、又人類全體の生活原理である。

この神話的な生活原理こそ、我日本國民にあらゆる異邦の文化を消化せしめ、遂に吸収せしめ、集大成せしめ、八紘一宇の世界國家を地上に實現せしむる指導原理であると私は信ずる。

自然醫學としての神道

— 祝詞の生理學 —

櫻 澤 如 一

謹みて本書を

久邇宮朝融王殿下に

さゝげ奉つる

目次

はしがき……………(九)

第一章 西洋科學と神道……………(一九)
——日本精神の優越性——

第二章 自然醫學……………(四九)
——祝詞の生理學——

第三章 神の國は米の國なり……………(七九)
——齋穗の神勅——『食す國』——

第四章 祝詞は國民生活原理なり……………(一〇一)
——祝詞讀みの祝詞知らずたる勿れ——

第五章 自然醫學と西洋醫學 …………… (一九)

——神ながらの道は自然醫學の道——

むすび …………… (二八)

附 録

第一 伊 勢 參 り …………… (一)

第二 正しい食物について …………… (二)

第三 食料輸入國たる英國の國民生活に現はれ

たる身土不二の原則冒瀆の結果 …………… (四)

は し が き

私は科學を偏重する事を排撃します。科學萬能と云ふ思想は人類を悲しむべき運命に導くもの、一つであると思ふのです。

人類の最大の幸福は、「健康」をその最も大切な不可缺條件とします。むしろ身心の健康それ自身が人類の最大幸福であるのでせう。その健康が科學（或はその應用にすぎない醫學）によつて始めて得られるものであるかの如く思ふのは大きな間違でせう。科學を有たない鳥、けもの、草木のたぐひも健康を思ふさま楽しんでゐるではありませんか。

科學だけが人類を幸福にするものである、と云ふ信念をもつてゐる人々が澤山あります。が科學は今日まで人類全體に何れ程の幸福を與へたでせうか？ 未曾有の大戦争大殺戮、恐るべき殺人工業、來るべき空襲等を考へますと、科學はむ

しる人類全體には不幸をより多く與へたものであり、又與へるものではないでせうか。

成程、科學は大へんな「便利」を我々に與へますけれど、便利は必ずしも幸福ではありません。先達、私がフランスから持つて歸りました『ブウ』（空の風）、の如き豆飛行機を我々が下駄代りに引つけて、出るにも入るにも利用する様になつた處で、それは「便利」なだけであつて幸福ではないでせう。「便利」と云ふことは人間を往々横着者、なまけものにしてしひます。又多くの犯罪を作り出す事もあるのですから、むしろ「便利」は時と場合では排斥されねばなりません。少くとも餘程注意しないと、ついその魅力に負かされて、しらすくの間、なまけものになつたり、罪を犯したりする事になります。孔子が科學的なものゝ考へ方を痛く排斥したのも當然であると私は考へます。科學的に、専門的に考へると云ふことは往々偏狹な、片輪の人間を作ります。

x

ものを見るのに凡そ二種の態度があります。一は全體的に大局から根本原理を直感的に、藝術的に見ようとし、他の一つは部分的に分析専門的に學術的に見ようとし、前者は原始的、古典的、神話的、詩人的で、後者は科學的、現代的、歴史的、散文的です。兩方とも存在する権利をもつてゐます。然し實際生活に於てもものを見るのに、我々はいつでも先づ全體的に見て、後に分析的に見ます。分析的に見るのも實はやがて全體的に正しい認識を樹てる爲なのです。全體觀に到達しない分析なら全く無益なものです。全體的に見るのが素人の態度であるとするれば、分析的に見るのは専門家の態度でせう。専門家が専門の事だけしか知らないなれば實生活に於ては全く素人以下であり、片輪であります。

自然科學なるものは、人生や自然を科學的に即ち専門的に分析的に見てゆくものでありますが、人生は科學的な知識ばかりで解釋する事は出来ません。我々は

藝術的な感情の世界も持つてゐますし、宗教的或は道徳的な精神的な意欲、心理の世界ももつてゐます。

科學的な知育のみを偏つて尊重せず、徳育をも大いに尊重しないとイケないでせう。この知育と徳育を圓滿に完全に一つに融合し、これに藝術的な表現を與へ、自然「全體」を把握せねば人生は無味乾燥になつたり、冷たくなつたり、放縱に流れたりするでせう。こんな「全體」自然を生きることには我々は最も大きな調和、安らかさ、楽しさ、幸せを見出すのではありませんか。こんな態度を精進し、こんな世界を生きる事を『道』と云ふのではないでせうか。『道』の世界は科學ではありませんが、非科學でも、又反科學でもありません。實にそれは、科學をも非又は反科學をも融合し超越した大自然、大人生、大生命の全體に慕らに參ずる全人的生活でせう。それは知情意分別以前の人間性を奪回する捨身没我の行でせう。全に歸入する個の自覺行でせう。歸命です。

x

私は偉大なる科學者は大きな素人であると思ひます。素人の直感と、素人の熱情と、素人の飽くなき探險冒險精神がなかつたら、古來の如何なる大發明、大発見もなかつたでせう。又、素人の原始的な全體觀がなかつたら如何なる大發明も大發明もなかつたであらうし、又、日常の生活、生成發展、人類の全ての進歩、文明文化の建設もなかつたでせう。この原始的な、直感的な、素人の全體觀を、現代的な分析的な専門的な部分觀の完成の羅針盤として利用するのが大へん重寶な事ではないかと、私は思ひます。

x

古代日本人は（古代支那人が「易」に於て試みた如く）この原始的な直感的な全體觀を徹底せしめ、完成せしめ、驚嘆すべき世界觀を作り上げ、それを實際的な國民生活原理として政治にも教育にも、經濟にも醫學にも、藝術にも學術にも、

應用してゐました。

私はこゝに自然醫學としての神道の優越を研究して見ました。私の自然醫學とは、治療醫學に代るべき約束をもつてゐる豫防醫學、その豫防醫學に代るべき資格をもつてゐる自然治療法、養生法、健康法、長生法、不老長壽法を意味します。それは、もう醫學ではなく、醫道であり、學ではなく道であり、技術ではなく藝術であります。部分でなく、個でなく、抽象でも綜合でもなく、全體であり、全機であり『道』でありますから神であります。神の道でありますから、そこには不安もなければ疑もなく、たゞ健全があるのみであります。それは吾人に宇宙、神、いのちの窮りなき大きさと、安らかさ、幸せ、無畏のちから、絶對の自由を與へるのであります。吾人はたゞこの道を行けばよいのであります。たゞこの一行あるのみ、たゞ「行」あるのみであります。實行するだけでよいのであります。

x

私は食養を實行すること二十年（研究時代十年、普及に専心奉仕して十年）にして、こんな信念に達し、そして祝詞を拜誦して見ると、食養とは神の道である、神の道を心で理解する事ではなく、肉體で實行する方法であること、健康を獲得することによつて神の道を體驗することであり、神の道を「體得」する唯一の不可缺條件であることを知りました。この私の領解は淺薄極るものであり、獨斷にみちたものであるでせうが、とにかく私に取つては唯一の安心であり、最高の世界觀であり、無双の人類生活原理であります。

それを明にして大方の諸君の御批判を乞ふものであります。合掌

櫻 澤 如 一

瑞穂醫院にて

昭和十一年九月廿六日朝

はしがき

一六

(来る十月十八日は偶々私の四十五回目の誕生日であります。その頃に本書を刊行する事の出来るのを私は無上の幸せと存じ、天地神明にひれ伏して謝し奉ります。)

第一章 西洋科學と神道

—日本精神の優越性—

第一章で著者は西洋的な、現代的な、分析、専門、客観、或は綜合による世界観が存在し得る如く、東洋的な、古色蒼然たる、總體、全一、主観による世界観も亦存在し得るものであり、更に日本的な神話的な或は原始的な、こと擧げなき——分析、綜合、専門と總體、全一を超越した、主観と客観の彼方の、自然そのまゝに溶け入つた、人間を自然に對立せしめない、捨身没我の平和な世界、人が自然に融合した『生き方』を直ちに實行世界觀とし、世界觀即生活、即ち全人世界觀もあり得る事を主張します。

西洋的な科學的な行き方を消極的とすれば、東洋的な物心一如、易の様な行き方は積極的でせう。そして日本的な一切の言擧を拒否するのは消極、積極を超えた、觀念を弄ぶ事を許さない、自然から人間を一寸も一分も離す事をさへ許さない——（丁度母親の乳房に無我無心で吸ひつく子供の様に）人間が大自然と云ふ母のふところに抱かれて、その甘露の如き乳を吸ふ事が最も幸せな事であつて、その乳房を放して、それを仔細に吟味したり、その乳を分析したり、それを疑つたり、或は母全體を研究したり、確認したりしようとするのは、最も不幸な事であると云ふ實行即思想の行動主義現實主義でせう。西洋風もいゝ、東洋風もいゝ。然し閑や金がなくては出来ない此の種の研究よりもなくては一日、一分もかなはない『生きる』こと、最も幸福に『生きる』ことを教へる日本的な、現實自然主義はもつと重要なものではないかと主張するのです。

第一章 西洋科學と神道

——日本精神の優越性——

物の見方の相違

西洋人と日本人の自然の見方は大へん違つてゐます。

木の葉が一枚散る……

それを西洋人が見ると引力、落下の法則、エーロフオイル（浮揚力と形との關係）等の數字に寫し出します。

それを日本人が見ると、哀愁、憂鬱、天下の秋、人生の凋落、人生のはかなさを囁く聲なき聲となつて心を痛く打たれます。

水の流れを見る……

と西洋人はその壓力、水量、エネルギー、落差を考へ、遂に大きな發電所を作り、夜をも消滅せしめる様な享樂の殿堂をうち建てようとする。

日本人はそこに消えかつ結ぶ泡沫うたかたを見、そゞろ、人生の大きな無限の流れを觀じ、無常を觀じ 世を捨てむと思ひ始めます。

爐邊にかゝつた湯沸しの湯氣を見ても西洋人は蒸氣機關を思ひ出すし、日本人はそのかすかな音に颯々たる松籟や、切々たる鈴虫の歌を聞きます。

秋、青く高く深く澄み渡つた大空を見て、まごころの明るく澄み渡らん事を日本人が願ふとき、西洋人は大空を心ゆくばかり飛翔する自由を獲得せん事を夢みます。

そこに飛ぶ鳥の影は遂に墜落せざる飛行機を西洋人に工夫せしめ、日本人は無限の哀愁を覚えしめる……
うらくくに

照れる春陽に

雲雀あがり

こゝろかなしも

ひとりしもへば

——家持——

こんな風に物を見る西洋人が、分析によつて物を見極めようと云ふ西洋科學を生み出したのは當然でせう。

櫻の花が咲いた……

科學はその花を一つ取つて分析する。その葉一枚を分析する。その枝を、その根を……そして花の色素のケキユレ構造式や、葉の呼吸の炭酸瓦斯と酸素の比率や、量や、葉綠素のスペクトルスコピックな研究寫眞まで作る。

けれどもそれらの克明な分析的部分的研究を積分する事によつて再現されるモザイクの「さくら」は凡そ日本人我々のこゝろに浮ぶ「さくら」の面影には關係のないものです。

朝日に匂ふ山櫻のはなやかさ、あかるさ、けだかさ、ほがらかさに敷島の大和ごゝろの姿を見ると云ひ、見たと云ふ日本人があります。

櫻の花びらや、葉や枝をいくら興へられても我々の知つてゐる様な山櫻のはなやかさ、あかるさ、けだかさ、やさしさ、ほがらかさ、そしてその謙遜さ（深山にひとり咲いて、ひとりいさぎよく散つてゆく敬虔なすがた）を組み立てる事は出来ません。ましてやその化學的分析から得た構造式や物理學的研究から得た方程式や、スペクトルスコピーが齎らすスペクトルや、植物生理學の教へてくれる解剖などは我々の「こゝろ」のさくらの姿を消して了ひこそすれ、モザイク像さへ示してはくれません。科學の示す「さくら」は無味乾燥で、いみじき、もの

ゝあはれを知る人々には耐えがたいものです。

およそ、日本ほど自然を歌ひ、禮讚し、嘆き懐しみ、慕ひ悲しむ國は西洋にな
い様です。風雅、さび、ものゝあはれなど云ふ言葉があらにはない様です。

よく見れば薺花咲く垣根哉

山路きて何やらゆかしすみれ草

——芭蕉——

あの見る影もない薺なづなの花に天地大自然の不可思議を見出して驚き嘆き、立ちつ
くす芭蕉のこゝろと、秋の日のツイオロンの獻すゝりなき歎に啼泣するヴェルレーヌのこゝ
ろとは何と深さに於て大きな差があるではありませんか。一人は大宇宙、物心一
如界の哲人、一人は人間愛慾界煩惱利慾の大海に沈没する悲しい感情の動物。

古池に飛び込む蛙の水音を聞いて天地未成以前の幽玄に飛行し得た人間が西洋
にあつたでせうか？ あるでせうか？

(敷島の國の住人は俳句や、詩や、殊に「しきしまの道」と云はれる和歌のころが分らなくては叶ひません。裸足で雪の上を走りながら雪景色を「美しいですネ」と示して車上のロチを驚かせた車夫さへあるのです。この詩心、歌ごゝろを有ち、優れた歌を作れるのでなくては日本の指導者階級の人々とは云へないでせう。)

『詩』と『科學』

西洋には詩はない、と私は斷言します。私共の謂ふ所の如き詩はないのです。もちろん極めて僅かな例外はあるでせう。たとへばホイトマンの「草の葉」の如きはごく幼稚ですけれどやゝ我々の詩に近いものでせう。『水むろ』のジョルジュ・ローデンバックや、「大樹の歌」を歌つたジョン・キルマーの如きは最もいみじきこゝろの友として我々と同じ世界に住む人々です。がそれは例外です。

しからば西洋には我々の詩に相當する様なものはないか？ たとへば、日本國民の最も熱烈な愛慕をこめた、天皇と云ふ言葉に相當するものとして、あちらには獨裁帝王エンペラーと云ふ戦慄、恐怖に充ちた言葉や、民主と云ふ不安、焦燥にみちた言葉がある様に？

あります！ それならばあります。

それは『科學』です。

科學は西洋の詩です。西洋人の生活では科學が、我々日本人の生活に於て詩が占める位置を占めてゐるのです。我々日本人、しきしまの國民くになみは、自然、世界、人生、宇宙を詩として「全體」を見る事を生きる道として來ました。西洋人は同じ自然、宇宙を分析し、研究し、「部分」を深く見る事を生きる道として來ました。木の葉を一枚見てもその呼吸系数を探し出して人間と植物の相關々係、相互依存を發見し、植物が炭酸ガスを分解して酸素を出してくれなかつたら動物は死滅

する外がないと云ふ様な事實を見出す科學は西洋人にとつては天地大自然を讀む詩です。

蛙の水に飛び込む音を聞いて天地未成以前の幽玄界に飛躍する自由さ奔放さをもつてゐなくても西洋人は地底から發掘された土器の缺片かけらや、化石を見て歴史以前の人類や、古世代の動物を想像の中に描き出す才能をもつてゐます。

鐵瓶の蓋を跳らせる蒸氣の中にワットは面白い詩を讀んだのです。

要するに西洋科學は物質的世界像を描寫し、禮讚する詩で、日本精神は精神的世界像を描き出す詩でせう。然し何れも同じ人間の所作です。物質的世界像は見る事が出来るが、精神的世界像は見る事が出来ない、とか或はその反對であるとかしたら何んなに人間は不幸でせう。まるで色盲の様ではありませんか。

今、日本では日本精神の優越で世界を思想的に征服しよう、統一しようと呼ぶ

聲が大分高い様です。然し、そんな意味の言葉を新聞電報などで聞き知ると西洋人は或は非常に不快を感じ、恐怖を覚え或は非常に侮蔑をもちます。

——日本人よ、お前達は雷燈を發明したか？ 汽車汽船を發明したか？ 電信電話は誰が作つたか？ 鐵砲や機關銃、飛行機や爆彈をお前達はもつてゐなかつたではないか？ 化學や物理は勿論、力學や天文、一切の工業、醫學、教育、法律まで全ては我々西洋人から借用したものでないか？ 印刷術は日本の方が早く發達してゐたとか、飛行機の考案は日本の方が先きであつたとか……ソナ事は全て議論の價値がない。明日は日本の科學が西洋のそれをリードするとしても、それは我々の開拓した地盤を利用してゐるに過ぎない。それが日本の優越を示すものではあるまい。

と云ふ風にあちらでは考へてゐます。

大體、早い話が日本精神、日本の思想なるものは西洋では有難く思ひません。むしろ唾棄すべきものとされてゐます。日本は西洋思想を大いに歓迎し、禮讃してゐます。殊に西洋思想の權化とも申すべき科學に對しては殆ど例外なしに絶對的賛成共鳴です。敢然よく西洋科學と戰つた日本人を私は一人しか知りません。石塚左玄！

『科學的』と云ふ肩書きをつける事は非常な名譽權威とされてゐます。純日本のなもの、純東洋的なものにも『科學的』なる肩書きをつける事により一段その光輝を増したかの如く信じてゐる人々さへあります。『科學的易斷』とか、『科學的生け花教授』とか、綠茶でも科學が證明してくれば賣れない様な時代です。今に科學的武士道などと申すのが流行するのではないかとさへ思はれます。戦法まで「科學的」になつて來ました、『スポーツ』など云ふのも在來の日本の健康法を一蹴した『科學的な』傾向ではありませんか。

日本精神が西洋で歓迎されない事は實に恐るべき程度に深刻です。西洋思想の精華たる西洋文學は日本に於て殆ど完全に紹介され、至る處歓迎されてゐます。セキスピヤーやゲーテは申すまでもなくジイドやマルロオ、シンクレヤーやトーマスまで愛讀されてゐます。それに引かへて何と云ふみじめな日本文學でせう。日本文學の外國語譯は、西洋文學の日本譯に比べて實に九牛の一毛にも當りません。毎週々々西洋映畫が數本、十數本封切され、大衆を引きつけてゐますが、日本映畫と云ふものは一本も海外に賣れません。名古屋陶器や大阪のメリヤスや玩具は數十萬圓の輸出を見せてゐますが日本思想の輸出は零です。否マイナスです。外人の日本研究が輸入翻譯され喜ばれてゐるではありませんか。處が西洋思想の輸入は、國家社會學說より、科學その應用たる醫學、工業に至るまで滔々として止む處を知りません。

日本の思想は果してそんなに時代に遅れねばならない程、古くさい、古色蒼然たる骨董品なのでせうか？ 日本の詩——日本精神——は西洋の詩——西洋科學に全く一蹴され影も姿も消すべき運命をもつてゐるのでせうか？

私は西洋の詩——科學——が存在する權利を有するなれば、日本の詩——日本精神も大いに存在する權利があるのではないかと思ひます。昨日まで日本精神が西洋科學輸入思想に壓倒され、「開國進取」の大旗が押し立てられ、古き日本が窒息されてゐたのは日本人が眞に深刻に日本精神を理解してゐなかつた爲で、又餘り長く馴れてゐた爲にその優越を忘れてゐた故であらうと思ひます。今日では日本精神が強調されてゐますが、それも尙、反動的で、いつか又、かの「尊皇攘夷」が「開國進取」に換骨奪胎、置き換へられた如く、いつの間にか西洋科學萬能になるのではないかと心配します。

私はこの二つの傾向——日本第一主義と西洋第一主義——の分立對峙を悲しむ

ものです。日本人でありながら西洋思想ばかりを宣傳する勇敢さは悲慘に見えま
すし、日本人であるが爲に西洋の優越を認取する事の出来ない頑固さも残念です。
私はこの二つの傾向に屬する人々を何れも純正日本人ではないと思ひます。第一
彼等は西洋思想を排撃しつゝ洋服を着用し、神道を唱導しながら神道に於て絶對
不淨食として禁じられたる肉食に舌鼓をうつてゐます。又、日本思想を排撃する
人々も、家にあつては和服を用ひ、箸を用ひ、日本の米を食つてゐます。何れも
その不徹底さに於ては同類項であります。西洋の思想は「西洋」を「長らく生き
て」見なくては分るものではありません。これだから日本の思想の輸出が困難な
のです。又これだから西洋思想の輸入が日本にいろ／＼な不祥事を起すのではあ
りませんか。

神ながらの道

日本は古來、言あげせぬ國と云はれてゐます。實際日本獨特の全體觀、大觀、直觀によつて世界、自然、人生を見ますと言あげする必要がないのです。全體を見れば全ては健やかな運行を示してゐるのです。自然は自ら然るべき道を進展してゐるのです。人爲を加へる必要もなく、議論をする要もないのです。

言あげする必要がない底の全體觀、直觀は、言あげによつて、部分的研究によつて世界像を建設しようとする科學の爲に改造訂正を受ける必要がない筈です。科學を抱擁するものでなくてはなりません。科學によつて動搖する様な全體觀、直觀なれば無くもがなであります。部分の研究によつて改造される様な全體の思想なれば無用でせう。無意義です。

しきしまの大和の國は言あげせずに楽しく生活する事の出来る國であります。それに八ヶ間敷く言舉げをせねばならない様に思ふ人々は言あげせぬ國の優越を如實に把握してゐないのです。

しきしまの道は國民が皆行くべき神ながらの道で、神ながらの道は即ち自然の道であります。

この神道は凡そ國民——人間全體——の生活に關する全ての規則を網羅してゐます。倫理道德はもちろん政治、財政、經濟、農業、工業は申す 及ばず、美學をも文學をも、實に醫學までも抱合してゐるのであります。

私はこの意味に於て日本に於ける西洋科學の位置を斷定しようと思ひます。私はあらゆる日本主義者、あらゆる日本精神の優越を信ずる人々、あらゆる日本傳統を尊重する人々や、あらゆる西洋否定論者が西洋科學にだけは排撃の矛先を向けず、手を出さずにゐたり、手を出して怪儀をする事を恐れたり、或はその絢爛さに恍惚としたりしてゐるのを最も不甲斐なく思ふものです。私はそれらの人々に日本精神の優越を結晶した神道は西洋科學を改正し改造し、攝取し、指導する原理である事を聞いて頂きたいのです。と同時に、西洋科學輸入を受持つてゐる

人々には、近代西洋科學の如き、部分的、分析的、客觀的、抽象的研究の學が成立し得る如く、全體的、非分析的、直觀（非主觀、非客觀）的研究も成立し得る事を了解せしめたいと思ふのです。

實に部分的客觀的分析的研究が科學的世界像モザイクをその克明な努力によつて建設するのは永久的な事業であり、分析と部分の分割が細微になればなる程、宇宙の微分方程式は増加すればする程、まとめるのが困難で不可能に近づき、而もそれが完成せねば科學は大成しないのです。「科學は永久に完成しない」、「科學は永久に完全な知識にはならない」とデュ・ボア・レモンが云つてゐます。ベーコンは「科學とは無智無能者の智識の蒐集」であると云つてゐます。科學が完成するのは永遠の彼方でせう。その完成しない科學を原理として、神聖不可侵なる權威として他を批判し、斷定する事は絶対に出来ない筈です。假りに科學が全體を認識把握する事が出来たとすればその時はすでに科學たるの生命を失つて

ゐる時です。科學は全體を把握すれば、すでに用のないものです。

神道の如き世界觀、人生觀、神道が與へる世界像、人生像、しきしまの道の行人が朝日に匂ふ山櫻の花に見出した、はなやかな、やさしい、あはれな、けだかい、こゝろのまぼろしを何うして科學的分析、部分的研究の途上で拾はれた零細な方程式や、不確實さで充ちた法則、顯微鏡的な物理學で、或はそれらを綜合した低級な智識で批判したり、改造したりする事が出来ませう。

我々が山櫻の花の匂ふのを見て美しいと心を打たれるのを、科學が分析によつてその美しさの成立分子フォルマントを示し、如何にその成立分子が美しくない事を見せつけてくれても、我々の見た櫻のうつくしさ、あはれさを否定される事はないでせう。又、反對に美しい事を教へてくれても、それ故に我々の印象がより美しくなる事もないでせう。我々はむしろ冷たい科學者にその顯微鏡の様な眼を外づさせ、その慘酷なメスを擱かせ、苛酷な化學藥品を捨てさせ先づ朝日に匂ふ山櫻全體の優

美な姿を見せ、いさぎよき花の散りかたを聞かせ、落花ふかき庭に立たせてその歴史を語り、時じくの嵐にあつても咲きそろふまでは散らない力強き生命力も話して見ようではありませんか。

科學の效用と限界

神ながらの道は生きとし生ける人間の皆行くべき道です。そこには人間に必要なすべてが備つてゐます。人間を幸福にする爲に必要なものがみな備つてゐます。科學者よ、神ながらの道を輕視し蔑ろにする事なかれ。日本主義者よ、神ながらの道を科學者の前に卑下する事勿れ。

我々の祖先は數千年、數萬年の昔、經驗から、全體的な研究を深めて、直觀によつて人生の幸福を建設するに必要な『條件』を把握してゐたのです。

幸福、平和、調和、健康など云ふ事は全體的な深い大きな、宇宙自然全體

の表現ですから、櫻の花の『美しさ』の様に、分析や客觀、小さな主觀や科學的研究からは生れません。もし、幸福（心の健康）や、健康（身體の幸福）やが分析的科學的研究に俟つものであれば、科學が生れる以前の人々は皆、健康や幸福を知らなかつたでせう。

健康と、それを建設する方法は太古の人でもよく知つてゐました。現代の生理學や醫學は健康や病氣を科學的に究明してその原因を明らかにしやうとしてゐますが、それは櫻の花の美しさを分析で出さうと云ふ様な試みではないでせうか？歐洲で私が知つた西洋科學の大家は全て科學の效用と限界を驚くほど謙遜なものにしてゐます。日本でも極く稀にそんな人があります—例へば醫學をやりながら醫學を少しも信賴しなかつたと云ふ森林太郎氏の如きです。處が俗な人は科學萬能を信じてゐます。西洋でも以前にはこんな人が多かつたのでう。「科學が全てを説明すると迷信する俗な頭ほど度し難いものはない」とアーサー・トムソンが云

つてゐます。然し只今では俗な人でも西洋では科學を迷信過信するより、むしろ疑問視し、或は恐怖し嫌惡する傾向さへあります。例へばフランス人は手術や、レントゲンやラヂウムを大へん恐れ且つ嫌ひます。

とまれ、科學は客觀的分析的部分的研究によつて世界像を完成しようとしてゐますが、それも成り立ち得る事はあるでせうが、その他に非客觀的非主觀（客觀とは主觀の一部分ですから）的、非分析的、非綜合（綜合とは分析の集合ですから）的な世界像、人生像がある事を我々は認めなくてはなりません。客觀なり、主觀なり、經驗なりを存在せしむるもの、經驗を知識ならしむるもの、即ち、根本意識とも、意識機能とも靈魂とも申すべきものに直接訴へて世界像を作る事も出来る事を認めなくてはなりません。そう云ふ根本意識機能或は靈魂があつてこそ始めて科學も生れる事が出来るのですから、その科學の成長はこの根本意識の世界像に織り込まれてゐる法則に従はねばならないでせう。そんな素朴な、幼

稚な原始的な根本意識とか直觀、空觀、物心一如觀などと云ふものは頗る低級なものであつて、何等權威がないと云ふのなら、その上に建てられた科學は更らに權威のないものでせう。

一ケの細菌の生命を見て、それに大生命の意義を感じない様な人は我々の生命の不可思議の根源を思ふ事は出来ないでせう。

神道は、分析と抽象を捨て、全一を大觀し、宇宙全體を直觀し、物心一如の世界像を出現せしむるものであります。こんな抽象的なお話はこの位で止して、私はいこゝでこの物心一如的全體觀の大成である神道の醫學衛生學的方面の優越を具體的に示す事によつて、分析的部分的科學的西洋醫學衛生學の貧困不安に一道の光明を翳して見たいと思ひます。

神道的——非分析的非部分的非主、客觀的に世界を觀るのは『觀る』のであつ

て、科學的に見るのは『見る』のであります。『観と見』の違いであります。心の『眼』で観るのと、肉體の『目』で見るのとの違いであります。宮本武藏の所謂「見の目弱く、観の眼強く」であります。

自然醫學と西洋醫學

大へん前書きが長くなりましたが、つまり神ながらの、日本獨特の非科學的の世
界像を持ち出す爲には、部分的分析的科學の外に、全體直觀的『道』諦も亦世
界像を有らうるものである事、その道諦は科學の上に立つべき、科學の指導原理
である事を断つてをかねばならないのでした。つまり神道の醫學的方面を説く爲
に、自然醫學が必しも科學的西洋醫學より低級なものではないと云ふ事を論じて
をかねばならないからでした。

もう一度言葉を換へて申せば――

部分を分析と抽象で研究してゆく事は永遠に際限なく、従つてその結果を綜
合すると云ふ事も永遠に不可能である、故にそれは全體を把握する研究とは
全く正反對の方向である。

よし顯微鏡やウルトラミクロスコープで細胞の世界が完全に把握出来る様
な時が來ても、その細胞が數億兆數京集つて一つの特異性ある生物――例へ
ば人間――を作る性能やその人間の生活現象一切を説明する事は出来ない。
（科學で細胞を假りに作る事が出来る様な時が來てもそれを集めただけで完
全な生命のある生物を作る事は出来ません。單なる細胞の集合體は一つの死
體にすぎません。これに生命を吹き込む事は部分的科學では出来ません。も
つと簡単な例を取つて見れば――例へば水です。科學は水を作る事が出来る
と云ひますがそれは實用にはならないしその上死んだ水です。科學製の水で
人間は生きる事が出来ません。）

けれどもこんな部分の分析と抽象を捨て、全體をそのまま、如實に認識する力を利用して全體の方則を把握した方が實際的には効果的である。分析と抽象には無限の時間が必要であるが、全體を如實に把握するには時間が不要である。

一瞬間で出来る。一念で我々は三千の世界を把握する事が出来る。分析と抽象の旅は無限の空間に行はれて終局がないが、その空間全體を直観によつて如實に把握するには一寸も歩く要はない。意識の母胎は時空を超越した大極である。靈魂である。(産靈——直靈、直毘、直日、和魂、荒魂等)。一人の人間の一生は生物的に生理的に社會的に精神的に無數の現象の連続である。今この二人の人間の一生の價値を問ふに當り、これら無限無數の現象を生理學、生物學、社會學、心理學等々の各専門家に検討させると結局それは永久に完結しないであらう。従つて價値を判定する事は出来ない。然しこの人

の一舉手一投足を見て眼光の鋭き人は瞬間にその眞價を看破するであらう。科學と道諦の相違と眞價、實際效用をこゝに我々は看取すべきではありませんか。

以上、私は科學が成立し存在し得る如く、科學的な方法、分析、抽象、綜合と云ふ操作を用ひずに、直ちに全體、如實の世界像を建設する方法も成立し、存在する事を主張しました。しかも、その様な直觀的全體的世界像は、科學的な分析的微分的世界像を作り上げる唯一の指導原理であることさへ主張しました。(卑近な例を取れば科學と全體學との關係、分析と全體との關係は子供の『組み合せ繪』——二十ヶ又は二十四ヶの小さな四角い木片の六面に各二十又は二十四に裁斷した六枚の繪を貼りつけたのを、完全な原畫に従つて組み合せてお手本の原畫通りの畫面をくみ立てる遊び——に於ける「繪の細片」と「完全な原畫」との關係の

様なものでせう。畫の細片を組み合せる前に原畫を見て大體の畫面全體を想像する事が出来ねば組み合せは出来ません。玩具の様な簡単な場合には或は出来る事もありますが、人生と世界とか、自然とか宇宙とか、生命とか幸福とか云つた複雑なものになると無数の不可解な小片があつて、組み合せて一枚の完全な畫像を得る事は困難でせう。この全體の畫像、世界、人生、自然全體の一枚刷り畫面を我々は先づ有たなくてはいけない、と云ふのが私の主張で、この全體觀によつて大局を認識して細部に處する道を教へるのが東洋の學であります。私はかくの如き大局觀、全體觀が細部局部に於ても我々の完全な指導原理たる事を證明し得るものと信じます。

茲に私は西洋科學の應用たる（又は應用たらん事を欲する）西洋醫學に對する全體觀の應用たる東洋醫學、殊に日本醫學——それを私は科學的醫學、分析的醫

學に對して自然醫學と呼びませう——の存在とその優越を主張しようと思ひます。この東洋的な全體觀、大局觀、世界觀は我が日本に於ては神道として渾然と大成されてゐます。神道は人生間活の物的心的一切の指導原理 含んでゐます。

私は自然醫學を提唱する爲にずい分おしやべりをしました。こゝいらで現代人科學者に對する説明とお斷りを不十分ながら打切つて、以下、自然醫學としての『神道』を先づ祝詞、壽詞、勅令によりつゝ明らかにして、後その優越を現代醫學的や統計的に話したいと思ひます。これは「神ながらのしきしまの道」の生理學的解説であります。

第二章 自然醫學

—祝詞の生理學—

茲で著者は、祝詞が國民生活原理であることを主張したいのです。治療醫學は發達完成すれば必然的に豫防醫學にならなくてはなりません。その豫防醫學が更に進めば、豫防醫學的な方法さへ必要としない無病健康法、不老長壽法と云つた様なものにならなくてはならないでせう。この無病健康不老法を私は自然醫學と呼びたいのです。

祝詞は國民生活の原理原則を規定するもので、昔はこれが政治、行政、經濟、財政、軍事、その他一切の中心であり、根源であつた様です。

この祝詞を通覽しますと、農作乃至は食物に關したことが大へん多く、古代の人々が『食物』を生命の素として、神として、正しく如何に眞剣に尊重してゐたかが明白に分ります。即ち『食物』を天つ御食の長御食の遠御食として、君と御民、國家全體の生成發展の最高條件として定めてゐる様です。處で食養道からこの國民食を仔細に吟味しますと、それは無病と、健康と、不老を與へる最上の食物であります。従つて祝詞にある『遠御食の長御食』は自然醫學である、と云つても差支へはないと思はれます。そこで私は本章に於て祝詞は國民生活原理を示す一種の生理であり、それは直ちに言擧げなき自然生活法、自然醫學を藏してゐるものであると主張するのであります。

第二章 自然醫學

— 祝詞の生理學 —

『むすび』の原理

日本古代は神代と呼ばれます。神代は神様ばかりでした。いろ／＼な神様がありました。

- 鹿屋野比賣神……………野の神
- 大山津見神……………山の神
- 瀬織津比咩神……………川の神
- 速開津比咩神……………河の神
- 沫那藝神……………泡の神

第二章 自然醫學

| | |
|--|------|
| 沫那美神 <small>あはなみのかみ</small> | 同 |
| 頰那藝神 <small>つらなきのかみ</small> | 水の神 |
| 頰那美神 <small>つらなみのかみ</small> | 同 |
| 志那都比古神 <small>しなつひこのかみ</small> | 風の神 |
| 久々能智神 <small>くくのちのかみ</small> | 木の神 |
| 御倉板舉之神 <small>みくらたなのかみ</small> | 稻の神 |
| 美津波能比賣神 <small>みつはのひめのかみ</small> | 水の神 |
| 大宣津比賣神 <small>おほげつひめのかみ</small> | 食物の神 |
| 豊宇食神 <small>とようけのかみ</small> (わくむすびの神)..... | 同 |
| 大歳神 <small>おほとしのかみ</small> | 同 |

(ふしぎに食物の神様はみな女神です)

名前は六ヶ敷いですが、要するに山の神様、海の神様、川の神様、泡の神様と

云ふ様ですべての自然現象がみな神の現れになつてゐるのです。自然現象ばかりではなく善悪正否でも神様です。——八十禍津日神、大禍津日神、神直毘神、大直毘神……これは、他の民族の汎神論や、萬有神教とは大變違つてゐます。何故かと云ふにこの八百萬の神々は全て天御中主神から出てゐるのです。

山も海も、野も川も、正も邪も、すべては一元から生れたと云ふ思想——これに日本思想の偉大さがあります。これが日本古代思想の核心「むすび」(産靈)と云ふ萬國無比古今獨歩の原理であります。この原理に従へば宇宙萬有同根一體でありますから萬物が同一の中心根源を有してゐる事になり、一つの中心、根源が萬物を統一してゐるのですから、分裂對立がなく、従つて争闘がない様です。萬物がその根源に於て同一實體にむすびついてゐるのですから、萬物は相互間に「むすび」つく運命にあり、「むすび」つく事が本來であり、「むすび」つかずには存在する事が不可能である事になります。

西洋に於ては近世になつて進化論がはじめて出現し、最近それは遂に元素進化論に辿りついたのであります。又相對性理論は時間と空間と物質或はエネルギーが不可分なものであると云ふ物理的一元論に到着しました。然しまだそれが二元的な分裂と對立を免れない人生觀を訂正するまでにはなつてゐません。唯物論や唯心論を攝取綜合々一して渾然たる全體の調和を實現するにはまだ遠い様です。「むすび」の原理即ち日本古代思想（皇祖皇宗古代日本人の宇宙世界自然人生の把握が如何に徹底であつたか、全體的世界が如何に優越したものであり且つ實用的なものであるかを見よ！）は元素一元論や、相對性理論、さては量子論、宇宙膨脹説等を許容するのみでなく、それらの諸説に先行し、それらの諸説に根本的に舊式物理學、舊式化學、古い西洋哲學の化學元素論、唯物論、進化論、唯物論の金城鐵壁たる因果律、機械學的宇宙觀、合法則性、機械學的生命論をも攝取すると云ふ大きな抱擁力をもつてゐます。その上、「むすび」の原理は元素一元論

や相對性理論、量子論、宇宙膨脹説等と獨立し分立對立してゐるものを一切合同せしめ融合大和^{だいわ}せしめ、共通せしめ、渾然たる一體、一大調和を現出せしむる力をもつてゐるのです。

と云ふのは分析的部分的、西洋科學、西洋思想の反對である全體の、總體的の古代東洋思想殊に日本思想の精華であり、最高峰である「むすび」（産靈）の原理は、數千年前にかくの如き近代西洋科學的思想を全體の、總體的に易々と消化してゐた事を示すではありませんか。全體を觀察して、完成した無双の原理が部分を分析して、發見する法則によつて不斷に訂正される科學を攝取し、訂正し、救済し、指導するのは當然であります。物質や時空や精神の世界はそれらを全て包含する大極^{ダイキ}、空^{シユンニヤク}（天御中主神）の中に存在するのですから、それらの世界の法則も亦當然攝取もされ指導もされるでせう。

萬有萬物が神の分生、部分であると云ふ古代日本思想は實に無限の深みをもつ

てゐます。萬有は唯一元の發動であり、その千差萬様の表現であるに過ぎないと云ふ事を『むすび』と云ふ簡素な言葉に盛つた古代日本人の優越は何物にも比べ様がないではありませんか。『むす』と云ふのは『生む』『創造』をすると云ふ事でせうが、それが微塵も人工、人爲を含んでゐない響きをもつてゐる處が面白いではありませんか。大自然の自然な飛躍であります。『ひ』は太陽であり、靈であり、魂であります。八百萬の神々は天御中主命の『ひこ』又は『ひめ』であり、一切萬物は『むすこ』と『むすめ』であります。人間に『むすこ』即ち男子と『むすめ』即ち女性がある如く萬物にも必ず男女があります。(英獨佛語の如く或るものは男性、或るものは女性と云ふのでなく)萬物必ず陰陽男女の對立から成り立つてゐます。(同じ水の神でも沫那藝神あわなきのかみと沫那美神あわなみのかみ、頰那藝神つらなきのかみと頰那美神つらなみのかみ等々々とあります。)

野の神が女性であつたら、山の神は男性でありました。カムロギ、カムロミ、

イザナギ、イザナミ等とすべて二柱ゐられます。ノリトを一柱で云はれたるは一度もありません。必ず二柱が合體したお心が表はれてをります。元來ノリトは神のお言葉であります。後世になつて神に答へるヨゴトがノリトと混同される様になりました。本來、『天津祝詞の太祝詞』と云ふのは神の言葉であります。

祝詞のりとは日本で最も古い最も大切な文章の一つでありますが、この祝詞は『むすび』の靈驗萬能、『むすび』即ち宇宙生成發展原理とも申すべきものであります。歴代天皇が御鎮魂遊ばす八神殿はこの産靈むすびの靈場であります。

産靈は宇宙の森羅萬象一切の根原であり、元素であり、生命であります。だから一切の人間、生物、は申すに及ばず、山川草木、日月星辰、風も火も同じ根本から分生し、交渉し、依存し、調和すべきものです。この宇宙萬有同根一體の原理が國際政治に表現されると神武天皇の八紘一宇の御理想になるのであります。

またこの萬有同根一體の原理が國內政治の形式に表現されすと、齋鏡齋穗、

君民一體邦人一如となりませぬ。國際的にも國內的にも政治の原理はこの萬有同根一體思想を基礎とする祭政一致でなくては叶ひませぬ。(國際的には四海同胞)

更にこの萬有同根一體の産靈原理が國民の生活原理となりますと、身土不二の原則と云ふ簡素な、しかも徹底した實踐生理學の鐵則となります。即ち身體と大地は不二である。(拙著「食物と生命叢書第六篇」『身土不二の原則』——一名「神ながらのをしもの道」參照) 國民全體にもあれ、個人にもあれ、その身心の健全を確立する爲には、その國土に働く産靈の力——その國土土産の食物を取らねばならない。その生命の完成に於て、その生みの親たる「うぶすな」の時間體系と空間體系を亂してはならない。この身土不二の原則に反逆を企て、生れ、育ち、生きてゐる國土の土産物を生命の糧としないと忽ち神罰が當り身心の健全を失ひます。全ての疾病はこの生命の生成發展の原則を破つて、自ら招いた當然の結果であります。この國土から生れる食物はすべて産靈の變形で、大宣津比賣、宇迦

稻魂、豊宇食神、大歳神、歳徳神、(トヨウケノカミを別名ワクムスビノカミと申し、産靈の直接な最も大きな表現であります) など云ふのはみんな穀物、殊に米に關係してゐます。(人類はその齒牙の形狀構成より見て立派に穀食動物であります。) 殊に「ウカノミタマ」と云ふのは稻、米の事で、米は人と大地を「むすび」つける靈魂であると云ふ意味です。實際我々國民を國土に「むすび」つける最も力強いものは米ではないでせうか。

「愛國」と云ふ言葉はやゝもすると一朝有事の際國民が自力で國家を愛する事を意味する様に、又國民の自由意志の一表現である様にとされてゐますが、身土不二の原則からこれを見ますと間違です。「愛國」といふ事は一生に一度か二度か國家の爲に自分を殺し犠牲にし、努力を怠る事ではなく、常住不斷に國土を食つて自分を生し、より強く、より大きく、より幸福にする事なのです。即ちその國土に産靈の力によつて出來たものを攝取し、それによつて身體を養ひ、外國産物を

排撃して以つて疾病を退け、健康を確立し、精神を強力にする（無畏不動心を育てる）一つの方法なのです。「愛國」とは「食す國」なのである。

邦人一如の生理學的解釋は身土不二の醫學、衛生であります。身土不二の原則の政治的翻譯は邦人一如であります。

身土不二の原則に立脚する國民保健道、自然醫學については後に今少し詳しく述べますし、又他の拙著に度々述べてもをりますが、ここでは單に邦人一如も、身土不二も、愛國も、神道も、政治も宗教も、外交も經濟も、道徳も學問も、農工、醫、武、全てが日本に於ては「産靈」の原理によつて一つの道に統一されてゐる點に讀者諸氏の御注意を特に惹いてをきたいと思ひます。

こゝで私共は先づ日本で最も古い文獻の一つである祝詞をザット一瞥せねばなりません。祝詞は古事記、日本書紀と同じく古いものでありますが、それが國民

の生活、行爲の原理を示すものである點では最も重要なものであります。古事記日本書紀の如きは、この原理に従つて展開する行爲の記録に過ぎないのであります。我々がかくの如き古典の精神を把握するには、この祝詞に現はれ示される原理をからだところ、即ち全身全力、全生命をあげて實踐、窮行、體驗、體得するより外には全く方法がありません。體驗は最上の實驗で、體得は最高の智慧で部分的分析的研究やその寄せ集めである科學の知識等が足下へも寄れるものではありません。

祝詞の大部分は食物に關係あり

いよ／＼この日本古典中で最も意義の深い、日本精神の生命原理である祝詞を研究させよう。

祝詞の從來の解説者等は大概、古代の人々の思想が幼稚で簡單であつた爲に天

地の偉大災禍に脅威され敬神信仰に進み、その結果祝詞の様なものが生れたと説いてゐます。私は古代人が現代人に比して殊に幼稚又は簡單であつたとは考へません。又祝詞が天神地祇に對する要求願禱であるとも考へません。祝詞はその文字の示す如く祝ひの言葉であつて、祈禱ではありません。本來の祝詞は神の言葉即ち「宣り言」であつたのです。神武天皇の八紘一宇の御理想の如きは現代人のインターナショナルイズム、世界國家説の如き近視眼的な淺薄なものではありませんから、古代人を幼稚とか簡單とか一概に云ひ去る事は出來ないでせう。敬神信仰を古代人原始人の簡單な思想生活の表現と軽く見る如き科學的な考へ方は、その簡素な形式が、簡單な科學的な法則や方程式よりも深い意味をもつてゐる事を知つたら訂正されるでせう。全體的な考察と、直觀と數千年數萬年の體驗から古代人が到達した敬神、信仰の簡素な精神、生活原理が、部分的な研究と客觀と云ふ抽象と、分析と云ふ生命を殺した研究と、僅かに數百年の實驗から現代人が

到達した科學で果して根本的に訂正され改造される事があるでせうか？

現代人が古代人に比して複雑であると云つても、現代人の大部分は矢張り極く簡單な精神しか持つてゐないのでせうか。敬神、信仰が古代的であると云つても、不敬、不信で犯罪が古代より多いと云ふなら現代的であると云ふ事に何の價值があるでせうか。

さて延喜式に收められた祝詞二十六篇を見ますと、大部分（二十篇ほど）は食物に關するものがあり、その中でも殊に重要なものは穀物作物に關するものばかりであります。この重要な祝詞をその用ひられる年中行事順に並べて見ますと、次の如くであります。

祈年祭の祝詞 （二月四日に用ひられる）

春日祭の祝詞 （二月、十月）

- 廣瀬大忌祭 (四月、七月)
- 龍田風神祭 (四月、七月)
- 平野祭 (四月、十一月)
- 久度古開 (同)
- 六月月次 (六月、十二月)
- 大殿祭
- 御門祭
- 鎮火祭 (六月、十二月)
- 道饗祭
- 神嘗祭 (九月)
- 大嘗祭 (十一月卯ノ日)
- 六月十二月次祭 (六月、十二月)

祈年祭の祝詞

此等の主要な祝詞の中でも祈年祭は最も重要なものとして大嘗祭の祝詞と共に我等の注意を惹くのでありますが、その中でも左の如き文章は、古代日本人が食物殊に五穀を生命と靈魂の根源として、即ち産靈^{むすび}として、又我々を大地國土に直接結びつける唯一のつなぎ(宇迦之御魂)として如何に尊重し、神聖視したかを物語るものでありませんか――

祈年祭 (毎年二月四日に穀物の豊穰を祈願して神を祭る)

『集侍はれる神主、祝部等もろく聞し食せと宣る。』

『高天の神に神留り坐す皇が陸神漏伎命、神漏彌命もちて、天つ社、國つ社と稱辭竟へ奉る、皇神等の前に白さく。今年二月に御年(農作)初め賜はむとして皇御孫命のうづの幣帛を朝日の豊逆登に稱辭竟へ奉らくと宣る。』

『御年皇神等の前に白さく。皇神等の依さし奉らむ奥つ御年を手肱に水沫畫き垂り、向肱に泥畫き寄せて、取り作らむ奥つ御年を、八束穂のいかし穂に、皇神等の依さし奉らば、神穂をは千穎、八百穎に奉り置きて、穂の閉高知り、穂の腹滿て雙べて汁にも、穎にも稱辭竟へ奉らむ。大野の原に生ふるものは甘菜、辛菜、青海原に住む物は鰭の廣物、鰭の狭物、奥つ藻菜邊つ藻菜に至るまでに、御服は明妙、照妙、和妙、荒妙に稱辭竟へ奉らむ。御年皇神の前に白き馬、白き猪、白き鶏、種々の色物を備へ奉りて、皇御孫命のうづの幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。』

『辭別きて、伊勢に坐す天照太御神の大前に白さく。皇神の見霧るかし坐す四方の國は天つ壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の霽く極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹控干さず、舟の鱸の至り留る極み、大海原に舟滿ちつとけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り、長道間なく、立ちつとけて、狭き國は廣く峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引寄することの如く、皇太御神の寄さし奉らば、荷前(初物)は皇太御神の大前に横山の如く打ち積みきて、残をば平らけく聞き食さむ……』

『御縣に坐す皇神等の前に白さく。高市、葛木、十市、志貴、山邊、會布と御名は白してこの六の御縣に生ひ出づる甘菜、辛菜を持ち參り來て、皇御孫命の長御膳の遠御膳と聞き食すが故に、皇御孫命のうづの幣帛を稱辭竟らくと宣る。』

『水分に坐す皇神等の前に白さく。吉野、宇陀、都祁、葛木と御名は白して、辭意へ奉らくは、皇神等の寄さし奉らむ奥つ御年を八束穂のいかし穂に寄さし奉らば、皇神等に、初穂は穎にも汁にも、穂の閉高知り、穂の腹滿て雙べて、稱辭竟へ奉りて、遺をば皇御孫命の朝御食、夕御食のかむかひに、長御食の遠御食と、赤丹の穂に處し食すが故に、皇御孫命のうづの幣帛を稱辭竟へ奉らくと、もろく聞き食せと宣る。』

以上は祈年祭の祝詞から引用した章句であります。その『奥つ御年(稻穂又は收穫)古代日本人にとつて一年は農作そのものであつたのである。』を、手肱に水沫畫き垂り、向肱に泥畫き寄せて取り作らむ奥つ御年(稻)を、八束穂のいかし穂に、皇神等の依さし奉らば初穂をば、千穎、八百穎に奉り……』

或は

『……汁にも類にも稱辭竟へ奉らむ』

或は

『大野の原に生ふる物は甘菜、辛菜、青海原に住む物は鱧の廣物、鱧の狭物、奥つ藻菜、邊つ藻菜に至るまでに……』

或は

『奥つ御年（收穫）を八束穂のいかし穂に……』

『皇御孫命の朝御食、夕御食のかむかひに……』

『長御食の遠御食と赤丹の穂に……』

『聞し食す』

『知し食せ……』

の如き言葉は取り分けて古代の日本人が食物を如何に、大切に、尊み貴めたか、又、尊む事を子孫に教へてゐるかを物語るではありませんか。

世界廣しと云へ共、我日本の如く、國を瑞穂の國と尊稱し、國民の生命の素を

齊庭の穂と讚美し、齋鏡齋穂、建國創業の昔しより、年々の初めの祭り、終りの祭り、或は御即位の大禮に當り、かくも國民の食物を尊敬し、祭り、拜ろがむで來た國が外にありませうか。

私一人の獨斷ですが、『知し食す』とは『食しものを知らず』即ち『食す國』『知らず』「身土不二の原則を教へ知らず」と云ふ意味であらうと思ひます。『食す國』『聞し食せ』の如き言葉と共に、この身土不二の原則については後に説きたいと思ひます。今は急いで、尙一つ、二つ祝詞を拜讀しませう。

その他の祝詞

春日祭

天皇が大命に坐せ、恐き鹿島に坐す健御賀豆智命、香取に坐す伊波比主命、枚岡に坐す天子八根命・比賣神、四柱の皇神等の廣前に白さく。大神等の乞はし賜ひのまに、春日の三笠

山の下つ石根に宮柱廣知り立て、高天の原に千木高知りて、天の御蔭・日の御蔭と定め奉りて貢る神寶は御鏡・御横刀・御弓・御梓・御馬に備へ奉り、御服は明たへ・照たへ・和たへ・荒たへに仕へ奉りて、四方の國の獻れる御調の荷前取並べて、青海原の物ははたの廣物・はたの狹物・奥つ藻菜・邊つ藻菜・山野の物は甘菜・辛菜に至るまで、御酒は麴の上高知り、麴の腹滿て並べて、雜の物を横山の如く積み置きて、神主に某の官位・姓名を定めて、獻るうづの大幣帛を安幣帛の足幣帛と平けく聞し食せと、皇大御神等を稱辭竟へ奉らくと白す。

かく仕へ奉るに依りて、今も去前も、天皇が朝廷を平けく、足らし御代の茂し御代に齋ひ奉り、常磐に堅磐に福はへ奉り、預りて仕へ奉る處處の家の王等・卿等をも平けく、天皇が朝廷にいかしやくはえの如く仕へ奉り、さかえしめ賜へと、稱辭竟へ奉らくと白す。

廣瀬大忌祭

(奈良縣北葛城郡河合村鎮座、官幣大社廣瀬神社の祭儀で、古來四月七日に行はれた。)

廣瀬の川合に稱辭竟へ奉る皇神の御名を白さく。御膳持たする若宇賀賣命と御名は白して、この皇神の前に辭竟へ奉らく、皇御孫命のうづの幣帛を捧げ持たしめて、王臣等を使として稱辭竟へ奉らくを、神主・祝部等もろく聞し食せと宣る。

奉るうづの幣帛は、服は明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物、楯・戈・御馬に、御酒は麴の閉高

知り、麴の腹滿て雙べて、和稻・荒稻に、山に住む物は毛の和き物・毛の荒き物大野の原に生ふる物は甘菜・辛菜、青海原に住む物は鱒の廣き物・鱒の狹き物、奥つ藻菜・邊つ藻菜に至るまで置き足らはして奉らくと、皇神の前に白し賜へと宣る。

かく奉るうづの幣帛を安幣帛の足幣帛と、皇神の御心に平らけく安らけく聞し食して、皇御孫命の長御膳の遠御膳と、赤丹の穂に聞し食さむ皇神の御刀代を始めて、親王等・王臣等・天の下の公民の取り作る奥つ御歳は手脛に水沫盡き垂り、向股に泥盡き寄せて取り作らむ奥つ御歳を、八つ束穂に皇神の成し幸はへ賜はゞ、初穂は汁にも穎にも、千稻・八千稻に引き居ゑて横山の如く打ち積み置きて、秋の祭に奉らむと、皇神の前に白し賜へと宣る。

倭の國の六の御縣の山口に坐す皇神等の前にも、皇御孫命のうづの幣帛を明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物、楯・戈に至るまで奉る。かく奉らくは、皇神等の敷き坐す山々の口より、さくなだりに下し賜ふ水を甘き水と受けて、天の下の公民の取り作れる奥つ御歳を悪しき風・荒き水に相はせ賜はず、汝が命の成し幸はへ賜はゞ、初穂は汁にも穎にも、麴の閉高知り麴の腹滿て雙べて、横山の如く打ち積み置きて奉らむと、王等・臣等・百官の人等、倭の國の六の御縣の刀禰・男女に至るまで、今年某月某日、諸參出で來て、皇神の前にうじもの頸根築き抜きて、

朝日の豊逆登りに稱辭竟へ奉らくを、神主・祝部等もろもろ聞き食せと宣る。

(註——御刀代は御年代、年は稻、代は田、神の稻を作る田なり)

龍田風神祭

「龍田に稱辭竟へ奉る、皇神の前に白さく。志貴島に大八島國知しめし、皇御孫命の遠御膳と赤丹の穂に聞き食す、五の穀物を始めて、天の下の公民の作る物を草の片葉に至るまで成したまはぬこと一年二年に在らず、歳まねく傷へるが故に、百の物知人等の卜事に出でむ神の御心は、この神と白せと負はせ賜ひき。」

「これを物知人等の卜事をもちて卜へども、出づる神の御心もなしと白すと聞き食して、……」

「皇御孫命の詔りたまはく、「神等をば天つ社・國つ社と忘るゝことなく、遺つることなく、稱辭竟へ奉ると思ほし行はすを、誰の神ぞ、天の下の公民の作り、作る物を成さず傷へる神等は我が御心ぞと悟し奉れとうけひ賜ひき。」

「こゝをもて皇御孫命の大御夢に悟し奉らく、天の下の公民の作りと作る物を悪しき風・荒き水に相はせつゝ成さず傷へるは、我が御名は天御柱命・國御柱命と御名は悟し奉りて、吾が前に奉らむ幣帛は、御服は明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物、楯・戈・御馬に御鞍具へて、品々

の幣帛備へて、吾が宮は朝日の日向ふ處、夕日の日隠る處の、龍田の立野の小野に吾が宮は定め奉りて、吾が前を稱辭竟へ奉らば、天の下の公民の作りと作る物は、五の穀を始めて草の片葉に至るまで成し幸はへ奉らむと悟し奉りき。こゝをもて皇神の辭教へ悟し奉りし處に、宮柱定め奉りて、この皇神の前に稱辭竟へ奉るに、皇御孫命のうづの幣帛を捧け持たしめて、王臣等を使として稱辭竟へ奉らく、と皇神の前に白し賜ふことを神主・祝部等もろもろ聞き食せと宣る。

奉らうづの幣帛は比古神に御服は明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物、楯・戈・御馬に御鞍具へて、品品の幣帛獻り、比賣神に御服備へ、金の麻笥・金の櫛・金の杵、明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物、御馬に御鞍具へて雜の幣帛奉りて、御酒は瓊の閉高知り、瓊の腹滿て並べて、和稻・荒稻に、山に住む物は毛の和物・毛の荒物・大野の原に生ふる物は甘菜・辛菜・青海原に住む物は鱈の廣物・鱈の狭物・奥つ藻菜・邊つ藻菜に至るまでに、横山の如く打ち積み置き奉るこのうづの幣帛を安幣帛の足幣帛と、皇神の御心に平らけく聞き食して、天の下の公民の作りと作る物を悪しき風・荒き水に相はせ賜はず、皇神の成し幸はへ賜はば、初穂は瓊の閉高知り、瓊の腹滿て雙べて、汁にも類にも、八百稻・千稻に引き居を置きて、秋の祭に奉らむ

と、王卿等・百官の人等、倭の國の六の御縣の刀禰・男女に至るまでに、今年の四月、もろく
參集はりて皇神の前にうじもの頸根築き抜きて、今日の朝日の豊逆登りに、稱辭竟へ奉る皇御
孫命のうづの幣帛を神主・祝部等被け賜はりて、隋ることなく奉れと宣りたまふ命を、もろく
聞し食せと宣る。」

平野祭

「天皇が御命に坐せ、今木より仕へ奉り來れる皇大御神の廣前に白し給はく、皇大御神の乞は
し給ひしまに〜。」(中略)

「四方の國の進れる御調の荷前を取り並べて、御酒は瓶の戸高知り、瓶の腹滿て並べて、山野
の物は甘菜・辛菜、青海原の物ははたの廣物・はたの狭物・奥つ毛波・邊つ毛波に至るまで、
雜の物を横山の如く置き高成して、獻るうづの大幣帛を平けく聞し食して、天皇が御世を堅磐
に常磐に齋ひ奉り、いかし御世に幸はへ奉りて、萬世に御坐し在さしめ給へと、稱辭竟へ奉ら
くと申たす。」

「また申さく。參りて仕へ奉る親王等・王等・臣等・百の官人等をも夜の守・日の守に守り給ひて

天皇が朝廷に、いや高に、いや廣にいかしやぐはえの如く、立ち榮えしめ仕へ奉らしめ給へと
稱辭竟へ奉らくと申す。」

大殿祭

高天の原に神留ります皇が親神魯企・神魯美命もちて、皇御孫命を天つ高御座に坐せて、天
つ鹽の鏡・劍を捧げ持ち賜ひて、言壽ぎ宣りたまひしく、皇我が宇都の御子皇御孫命、この天
つ高御座に坐して、天つ日嗣を萬千秋の長秋に大八洲豊葦原の瑞穂の國を安國と平らけく知し
食せと言寄さし奉り賜ひて、天つ御量もちて、事問ひし磐根・木根立ち、草のかき葉をも言止
めて、天降り賜ひし食國天の下と、天つ日嗣知し食す皇御孫命の御殿を、今奥山の大峽・小峽
に立てる木を齋部の齋斧をもちて伐り採りて、本末をば山の神にまつりて、中間を持ち出で、
來て、齋鉏をもちて齋柱立て、皇御孫命の天の御翳と造り仕へ奉れる瑞の御殿、汝屋船命に
天つ奇し護言をもちて、言壽ぎ鎮め白さく、この敷き坐す大宮地は底つ磐根の極め、下つ綱根
はふ蟲の禍なく、高天の原は青雲の靄く極み、天の血垂り、飛鳥の禍なく、掘り堅めたる柱・
桁・梁・戸・扉の錯ひ動き鳴ることなく、引き結べる葛目の緩び、取り葺ける草の噪きなく、
御床つひのさやぎ、夜女のいすゞき、いつゞしきことなく、平らけく安らけく護り奉る神の御

名を白さく、屋船久久遲命、屋船豐宇氣姫命と御名をば稱へ奉りて皇御孫命の御世を堅磐に常磐に護り奉り、五十樞御世の足らし御世に田永の御世と福はへ奉るに依りて、齋王作等が持ち齋まはり、持ち淨はり造り仕へ奉れる瑞の八尺瓊の御吹の五百つ御統の玉に、明和幣・曜和幣を附けて、齋部宿禰某が弱肩に太樞取り懸けて、言壽ぎ鎮め奉ることの漏れ落ちこむことをば神直日命・大直日命聞き直し見直して、平らけく、安らけく知し食せと白す。

詞別きて白さく、大宮賣命と御名を申す事は、皇御孫命の同殿の裏に塞り坐して、参入り罷出る人の選び知らし、神等のいするこびあれば坐すを、言直し和し坐して皇御孫命の朝の御膳・夕の御膳に供へ奉る。」(下略)

鎮火祭

「高天の原に神留り坐す皇が親神漏義・神漏美命もちて、皇御孫命は豊葦原の水穂の國を安國と平らけく知し食せと天の下寄さし奉りし時に、事寄さし奉りし天つ詞の太詞事もちて申さく。」(中略)

「水神・匏・川菜・埴山姫・四種の物を生み給ひて、「この心悪しき子の心荒びそは、水神・匏・埴山

姫・川菜を持ちて鎮め奉れ」と事教へ悟し給ひき。

これに依りて稱辭竟へ奉らくは、皇御孫の朝廷に御心一速び給はじとして進る物は明妙・照妙・和妙・荒妙五色の物を備へ奉りて、青海原に住む物は鰭の廣物・鰭の狭物・奥つ海棠・邊つ海棠に至るまでに、御酒は醴高知り、醴の腹満て雙べて、和稻・荒稻に至るまでに、横山の如く置き高成して、天つ祝詞の太祝詞事もちて、稱辭竟へ奉らく、と申す。」

大嘗祭

(大嘗祭、大新嘗祭の儀で天皇がその年の新穀を聞き食すにつけて神祇にも獻られる祭儀。今の嘗祭とは違ふ。)

集侍はれる神主・祝部等もろく聞き食せと宣る。

高天の原に神留り坐す皇が睦神漏伎・神漏彌命もちて、天つ社・國つ社と敷き坐せる皇神等の前に白さく。今年十一月中つ卯の日に、天つ御食の長御食の遠御食と、皇御孫命の大嘗聞き食さむ爲の故に、皇神等相うづのひ奉りて、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉らむと依さして、千秋の五百秋に平らけく安らけく聞き食して、豊明に明り坐さむ皇御孫命のうづの幣帛を明妙・照妙・和妙・荒妙に備へ奉りて、朝日の豊榮登りに稱辭竟へ奉らくを、もろく聞き食せと宣る。事別きて、忌部の弱肩に太樞取り掛けて、持ちゆまはり仕へ奉れる幣帛を神主祝部等請けて事落ちず捧げ持ちて奉れ、と宣る。

以上、祝詞に現れた『天つ御食』即ち神々の御食、『遠御食』即ち『遠き祖先の食物』、『長御食』即ち末長く國民のあらんかぎり傳ふべき國民食の傳統は、生物學的な空間體系と時間體系の正しき認識——云ひ替へれば、「自然を生きよ」と云ふ教へであります。

この教へを實行すれば（たゞ稱へるだけでは駄目!!!）忽ち、無病息災、自由に
して正しき、簡素にして神々しき、直く、楽しく、安らかな世界に入る事が出来
ます。この祝詞生活法は不老長壽君子國、文化國日本を世界第一の病弱國となら
しめた西洋科學（殊にその應用を粧ふ對症的治療醫學）や西洋物化物明の産んだ
交換經濟、資本主義經濟機構に指導原理を與へ、是正を加へる自然醫學でありま
す。

第三章 神の國は米の國なり

——齋穗の神勅——『食す國』——

天下の大法と云ふ大法は全て、何れの世、何の國を問はず、究極すれば終に簡素な『宇宙の大法』に到達しなければなりません。

その大法は詮する處、人間が如何にすれば幸福に生きる事が出来るかを極めてやさしい形で教へるものでなくてはならないでせう。

神ながらの道はそれだと私は思ひます。それは人間を大地にむすびつける食物の信仰です。食物の宗教です。人間と大自然を最も直接にむすびつける大地の産物を正しく認識することが、人間に人間の親、生命の根源を發見せしめ、歡喜せしめ、安心を得せしめ、和平を保たせ、相親しませる第一條件ではありませんか。

日本人はこの意味で食物を尊重して來ました。米をその代表者として大切にして來ました。皇祖天照大神は米を非常に尊敬されました。國民尊敬の中心、伊勢神宮は皇大神とこの米、即ち宇迦之御魂豐受大神を祀つてあるのです。神の國は米の國であり、食物の國、「食す國」であるのです。——こんなことをこの章で私は述べます。

第三章 神の國は米の國なり

——齋穗の神勅——『食す國』——

「食す國」の政治

以上の如く、我が國で最も古い最も重大な文獻は多く我國民の食物に關するものであり、又、祭政一致のむかし、政治が祭りごとであつたころ、祭と云ふ祭りの主なるものは必ず食物に關するものであつたことが證明される譯であります。

祈年祭としごひのまつりは農業を祭る政治の第一の行事でありました。農業は國民の『生命』工業であり、『國民製造』の工場でありました。

農業とは『食す國』の政です。食す國とは、國土を食す（土産物を食ふ）の意です。農業即ち政治でありました。農業は國民の食物—生命の原料—を作るので

すから、云ひ換えれば國家を作ることになります。『國家は國民と土地と主權者』から成り立つ、と西洋國家學說の分析的な考へ方から云ふのが、假りに正しいとしても、その土地が不毛の土地であつたら成り立たないでせう。國民は土地から生まれる食物によつて生きるのであり、生命は實に土地から、大地から、大自然から生れるのであり、大地、大自然によつて生きてゆくのでありますから、國家はその分子である人間と共に大地の産物であります。大地の産物が生れ出で、國家、社會を作り、生き繼いでゆく微妙な不可思議な機構は全く産靈ひんりやうの力、高皇產靈尊、神皇產靈尊の御仕業であり、高神兩產靈尊は生成發展の原理を構成する『陰陽』二要素の代表者であります。これを神格化した處に日本精神の特異性があります。それで日本精神から申せば『國家とは天地の大法の一表現』であり、『神の産物が神を認識する形式』であり、『神の分靈が、親靈に歸る道程』であり、『個が全に歸入する機縁』であります。天下の大法は全て、何れの世、何れの國に於て

も、究極すれば終に『宇宙の大法』に到達するものでなければなりません。如何なる國家も、社會も、國家の大本、人生の根源である食物、食物の母胎である大地を難れる事は出来ないし、大地や大空や、それらに屬し、それらの間に生れる全ての産物は、その出現の原動力、原理、千古を貫く大道大法を遵守し、體得し、それを生きるのではなくては必ず破れる。身土不二の原則は全ての人間の「法」の根柢である。

この大道、大法をこの現し身に生きる第一歩が農業である。故に我が國では神代の昔より 皇祖は御田に下り立ち給ひ、御衣を織らせ給ふたし、繼體天皇の勅語にも

『一夫耕さず、則ち天下或はその飢うゑを受けむ。一婦織らず、則ち天下或はその寒を受けむ。

この故に帝王躬ら耕し、以て農業を勸め、后妃親ら蠶し、以て女功を勤む。況

んや群郷百性にして農績を廢して能く殷富を致すべけんや』
とあり、農が國の大本である事を明示されてゐます。

昔、我が國に於ては、ある期間を限つて、農場に於て人々が共同勞役に服するのを「公につくす」と云ひました。おほやけは「大家、親の食」を奉る事を意味し、單なる勞働ではなく神事でありました。この時には 天皇も臣下も一緒になつて働き、その臣下は大忌、小忌と分けられてゐました。大忌みは大齋み、小忌みは小齋み、で、前者は大物齋みをする 天子直屬の臣下、後者は少し物齋みをする地方指導者であつた様です。一天萬乗の君と、百姓が共に親しく農業に従事すると云ふのは何と云ふ朗らかな、有難い國でせう。

こもよ、みこもち

ふくしもよ、みふくしもち

此の丘に、菜つます娘

家告らへ、名告らさね

虚みつ大和の國は

おしなてべ、あれこそをれ

しきなべて、我れてこそませ

あこそはのらめ

家をも、名をも。

——雄略天皇——

(大意)

(甘菜、辛菜の精靈を入れる籠、美しい大切な籠をもつて、
大地を掘し起す精靈のこもつた棒串(古代の小鋤)、

奇しき貴きホグシをもつて

此の丘のべに、菜を摘みます處女よ、

あなたの家は？ 名は？

教へて下さらないか？

私？

私は、そらみつ大和の國を

おしなべて、しきなべて

知るすものです——

私の名も家も教へませう……)

この歌に現はされた古代日本人の生活の平和な、明るい、自由な空氣、親しみ、
いづくしみにみちたこゝろを私共はふかく味はひたいものです。

應神天皇も亦農業に勵いそまれた天子様で又の御名を品ホムダ太天皇と申し、譽ホムダ田とも書
きますが、秀御田ホムダを意味し、常々稻田農作を獎勵され、農作物をみそなはせ、農
作物の種子の分配や水利水便、曆の發布、普及を努力遊ばされたのです。

更に上つて景行天皇の御治世について申上ますと、益々大御心が如何ばかりと
云ふ事が分ります。天皇は御即位早々から農事に大御心を用ひ給ひ、各地に巡察
官を送られ、御自らも各地に巡行され、後には九州、筑紫、日向に數年御滞在に
さへなりました。

その後も或は武内宿禰を北陸、東北に送られ、皇子日本武尊を送られてゐます。
天皇親らも、宿禰も、日本武尊も全て未開地へ稻の種を御持ちになつて人民に分
配されたと云ふ事です。古代の日本人は、齋鏡、齋穗の神勅を嚴かに奉持し、高
天原の齋庭の稻穗を宇迦之御魂と稱え、土地と人間の結合魂であり、身土不二、

邦人一如、國家生成の原理を具有する神實なる事を知つてゐたが故に、反く夷を平げ、和らげ、歸服せしめる爲に完全な食物としてこの神實を興へ、心から、肉體から神の息吹きに生きる様にされたのであります。

日本歴史は農業史であり、米の歴史であり、日本文明は米の文明であります。神代に『豊葦原千五百秋瑞穂の國』と命名され、

天孫降臨に當つては、『此の寶鏡を視まさむこと、まさに吾を視るが如くすべし』
『吾が高天原に御す齋庭の稻穂を以て亦吾兒に御せまつる』（齋鏡、齋庭の神勅）と勅されしより、歴史は常に米、農業についての文獻に充たされてゐます。

食者天下之大本也、黄金百貫不可療飢、白玉千箱何能救冷

——宣化天皇——

時に天照大神喜びて曰く、

「是の物は則ち顯見蒼生の食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち粟、稗、麥、豆を以つて陸田種子となし、稻を以て水田種子となす。

又よつて天邑君を定む。即ちその稻種をもつて始めて天の狹田及び長田に殖う。その秋の垂顛、八握にしなひて甚だ快し。」

——日本書紀——

大嘗祭は米の祭

以上の如く歴史の上に、過去の記録として農業、米、稻の崇拜が明らかであるばかりでなく、今日の歴史として、生きた歴史として、現在の生命として、國家の政治としても亦、農が國の大本として、稻が國民生命、國家生命の根源として尊重されてゐるのです。

即ち年々月々の祭り取り分け神嘗祭は申すに及ばず、御即位の大禮として、天子様の御一生で只の一度の大切な大典が、實は農業即ち齋庭の稻穂の神勅の壯嚴

に外ならぬのであります。

天孫降臨に當り高皇產靈尊は、神事を司る最初の神様、天兒屋命太玉命に次ぎの如く勅を賜りました——

——吾はすなはち天津神籬及び天津磐境を起し樹て、まさに吾孫の爲に齋ひ奉らむ。汝、天兒屋命、太玉命よろしく天津神籬を持ちて葦原の中國に降りて、亦吾孫の爲に齋ひ奉れ。

この天兒屋命、太玉命に天照大神は次ぎの如く勅を賜ひました——

——惟ば、いまし二神亦同じく殿の内に侍ひて、善く防ぎ護ることをなせ。

——吾が高天原にきこしめす齋庭の稻穂をもつて亦吾が兒に御せまつる。

すなはち、神の國（精神的）の鎮めであり、國の民（肉體的）の護りである天

津神籬、天津磐境と共に、皇孫及天孫民族の生命の素、生命の根源として稻穂、全ての「法」の根柢たる「身土不二の原則」の具現者たり、主體たり、法身たる稻穂を守ることを共に天兒屋命、太玉命に御一任になつたのを見ても如何に、稻穂が重要視されたかゞ分りませう。

奈良朝までは一族の稻上祝から始まつて、村々の新嘗、初穂荷宰の相嘗、天照大神と天子の神嘗と云ふ順序に初穂の祭りが下から上へ奉られて行きました。これには、深い仔細のある事で、即ち、國民が各自の魂を打ち込んで差し上げる初穂に、それ／＼の階級の指導者が自分の魂を打ち込み、添え込んで更らに上の階級へ差上げると云ふ、——個人が國家に、個體が全一に歸命すると云ふ表現であつたのです。身土不二の原則を守つて作り上げた稻穂を、全から引き出した無数の個を、バラ／＼に不統一に費してその根元を忘れぬ様に、身土不二の原則を

念願し、生命の根源を憶ふ様にと、定められたのがこの祭りの下から上へ上つて行く理由なのです。この祭りを總稱して「秋祭り」と云ひます。

この秋まつりの中で、大嘗おほんべは、最後で最上の祭りでありますが、これが全ての秋祭りの始まりであり、他の祭りはこれの延長に過ぎませぬ。日本書記の古註には嘗と云ふ字に「おほんべ」と云ふ訓がついてゐますが、それが證據であります。

高天ヶ原で天照大神が、天の狭田、天の長田の稻穂をもつて天つ神々に差上げられました。その古を稽なまつて、天の若彦がくり返し、更に皇孫に木花咲耶姫なまが奉りました。その習慣稽古を忘れずに、天子様も御一代の御代始めに一度大嘗をいとも厳かに行はれます。これが御即位の大禮に於ける大嘗祭で、以後毎年行はれるのは新嘗祭神嘗祭であります。

この大嘗おほんべのまつり祭は神祕な古色蒼然たる、原始民族、神代ながらの行事に充ちてをります。それは數千年數萬年を経ても、我民族が神代を忘れず見失はぬ様に、と

云ふ心から出たものであります。こゝに我民族獨特の底力、根強さがあります。

(悠基殿、主基殿の如きは全く神代ながら堀立小屋式で壁も天井も庭になつてゐる相です。そこに皇祖の深い御心づかひを考へると我々は、たゞもう頭が下るばかりではありませんか。)

大嘗の祭りでも最も神祕なのは鎮魂式で、それについて、とよあかりのせうえ豊明饗宴會、なほらひの祭、五節の舞、みたまくばり等々が行はれます。それから、天子が天孫瓊々杵尊となられて、御生れなされた時から、赤ン坊時代、御成人、御即位、御治世まで——後袴つけの御儀、天皇靈附着の御式、至尊としての御物忌み、物忌解放の御儀、みそぎの御式、天津神のみこともちの御式、皇后選定帳台の御試みの式、最後に天つ祝詞の傳達の御儀、臣下代表者の服從誓約の御儀、その他、生産状態報告祭等——澤山並べきれぬ程の御儀式があります。

さてこの大嘗祭に於て、日本中から奉られたお米（即ち百性國民全體の魂）を悠基殿、主基殿に引き入れる時の御儀式は、聞くも畏く恐こき森嚴さに充ちたものであります。その時の警蹕は——

をを……し……し……

ををしい……ををし……し……

と云ふ餘韻長き嚴かなものであると云ふことです。この時、一天萬乗のすめらみこと、天子様も親しく頭を御下さげになつて、米の靈、國民の生命の根源、宇迦之御魂の入御を奉迎されます。こゝに我が國家成立、國民生活の根柢、君民一體の神ながら、しきしまのくにの根強さがあります。

この御儀式は、天皇の唯一最高の任務が實に、天津御神、皇祖皇宗のみこともち——天津御神のみことの體現者、國家の法身の具現者として、國民生命の根源の奉齋者として國家を経倫される處にある事を物語るではありませんか。

農は國の大本

こゝで、考へて見ますと、我國の重要な神々は全て農業の神様ではありませんか。

天御中主尊は天地の主神ですから勿論、農事の大本を司られますし、次いで生りませる高皇産靈尊、神皇産靈尊は萬物生成の神、イザナギ、イザナミ兩尊は「國生み」の大業をなされたのですから、勿論農を大本とされましたし、天つ神の御神勅

——豊葦原千五百秋瑞穂の地あり、宜しく汝往いて循らすべしを承つて御出かけになつたと云ふ記録もこれを證明します。

海の神、川の神、山の神、木の神（くゝのちのかみ）草のあや、かやひめ、（又名野槌）などもイザナギ、イザナミのみことの御子です。

それから天照大神——太陽——や、月讀尊——月——、素戔鳴尊、火の神、土の神、植山姫、水の神（みづはのめ）もみなイザナギ、イサナミのみことの御子神です。何れも農業になくはならぬ神々です。火の神と土の神が、稚産靈（わかむすびのみこと）即ち保食神（うけもち）を生まれました。

倉稻魂命（うかのたまのみこと）も風のかみ（級長津彦命）と共にイザナギのみことの御子です。

そのほか限りもなくをはずのですが、中にも大己貴神、少名彦命、さては大國主や、木の花咲耶姫は讀者諸君もよく御承知の如く大切な農業の神々です。

さて、も一度、大嘗祭の祝詞を拜見して見ますと、益々私共は深く皇祖神の御こゝろつかひが忍ばれるのですが、殊に

——天つ御食の長御食の遠御食と皇御孫命の大嘗聞し食さむ爲の故に……の句に到つては、感激いよ／＼新らたなるものを感じるではありませんか。

大嘗祭、天皇踐祚の日、中臣氏が臣民代表として、奏聞、御代を壽き奉る「中臣壽詞」を最後に拜見させう。

これを拜見しますと、もう我々瑞穂の國民の生活原理は、日月の如く明らかに我々の頭上に、心の中に輝き渡るのを知るでせう。

中 臣 壽 詞

現つ御神と大八島國知し食す大倭根子天皇が御前に、天つ神の壽詞を稱辭定め奉らく、と申す。

高天の原に神留ります、皇が親神漏伎神・漏美神をもちて、八百萬の神等を集ひ賜ひて、皇孫尊は、高天の原に事始めて豊葦原の瑞穂の國を安國と平らけく知し食して、天つ日嗣の天つ高御座に御坐しまして、天つ御膳を長御膳の遠御膳と、千秋の五百秋に、瑞穂を平らけく由庭に知し食せと事依さし奉りて、天降り坐し、後に、中臣の遠つ祖天兒屋根命、皇御孫尊の御前に仕へ奉りて、天忍雲根命を天の二上に上せ奉りて、神漏伎・神漏美命の前に受け給はり申すに、皇御孫尊の御膳つ水は、うつし國の水に天つ水を加へて奉らむ、と申せと、事教へ給ひし

に依りて、天忍雲根神天の浮雲に乗りて、天の二上に上り坐して、神漏伎・神漏美命の御前に申せば、天の玉櫛を事依さし奉りて、この玉櫛を刺し立て、夕日より朝日の照るに至るまで、天つ詔戸の太詔刀言をもちて告れ。

かく告らば、まちは弱蒜にゆつ五百篁生ひ出でむ。その下より天の八井出でむ。こをもちて天つ水と聞し食せと事依さし奉りき。かく依さし奉りしまに、聞し食す山庭の瑞穂を四國の卜部等、太兆の卜事をもちて仕へ奉りて、悠紀に近江國の野洲、主基に丹波の國の氷上を齋ひ定めて、物部の人等・酒造兒・酒波・粉走・灰焼・薪採・相作・稻實の公等大嘗會の齋場に持ち齋まはり參來て、今年十一月中つ卯の日に、ゆしりいつしり持ち、恐み恐みも清まはりに仕へ奉り、月の内に日時を選び定めて献る悠紀・主基の黒木・白木の大御酒を、大倭根子天皇が天つ御膳の長御膳と、汁にも實にも赤丹の穂にも聞し食して、豊明に明り御坐して、天つ神の壽詞を稱辭定め奉る。皇神等も千秋五百秋の相嘗に相うつひ奉り、堅磐に常磐に齋ひ奉りて、いかし御世の榮へしめ奉り、康治元年より始めて、天地・月日と共に照らし明らし御坐さむことに、本末傾かず、茂し槍の中執り持ちて、仕へ奏る中臣祭主正四位上行神祇大副・大中臣朝臣清親、壽詞を稱辭定め奉らく、と申す。

また申さく。天皇が朝廷に仕へ奉る親王等・王等・諸臣・百官人等、天の下四方の國の百姓もろく集侍はりて、見食べ、尊食べ、歡び食べ、聞き食べ、天皇が朝廷に茂し御世に八桑枝の立ち榮へ仕へ奉るべき禱を聞し食せ、と恐み恐みも申し給はく、と申す。

第四章

祝詞は國民生活原理なり

— 祝詞讀みの祝詞知らずたる勿れ —

祝詞は何故、國民の國民原理たり得るかと思ふ事は言挙げしようと思つて私はこの章で一生懸命なのです。

『生命現象は食物のない處には生れない』と私は信じます。故に

『食あり、故に命あり』

と斷じ、その食の意義を論じようと思ふのです。

『食』とは生命の材料一切を意味します。所謂食物は勿論、光りも、空氣も、大氣壓も、濕度も、溫度も、磁氣も、その他あらゆるものもこゝに含まれてをります。生命の無窮の發展を實現せしめる爲にこれを正しく取る方法を『養』と云ひます。——これで私共の云ふ『食養』が西洋人の云ふ食養や榮養や、まして食餌療法の如きものとは雲泥も音ならざるものである事が分るでせう。

『食養』は療法ではありません。生理的修養であつて、人間の精神肉體兩生活の修養の極致であり、人類の生活の根本原理であります。

第四章 祝詞は國民生活原理なり

——祝詞讀みの祝詞知らずたる勿れ——

天つ祝詞の太祝詞と大祓の祝詞の關係

我國の最も重要な古文獻の一つである祝詞を私は、我國民の（そして全人類の）生活原理であると思ひます。その大部分は明瞭に、直接に我々に我々の行くべき道生すべき道を示してゐます。

天つのりとのふとのりとは殆ど全て、食物に關する奇妙な神祕な美しい言葉を含んでゐます、例へば六月十二月の月次祭の祝詞の如きです——

……皇神らの依さし奉らむ奥つ御年（收穫—稻）を

八東穂のいかし穂に依さし奉らば
皇神等ら初穂は穎にも汁にも
稊の閉高知り、稊の腹満て雙べて
稱辭竟へ奉りて
遺をば皇御孫命の
朝御食、夕御食のかむかひに
長御食の遠御食と
赤丹の穂に
聞し食すが故に……

かくまで食物に關する奇妙な祝詞の多いわけは六月晦大祓の祝詞として、六月及十二月晦に、百官以下天下萬民の罪と穢を祓除する爲めに朱雀門で行はれる儀

式の祝詞に明らかに示されてゐます。

これは、皇御孫命の知し食す豊葦原水穂の國に、もろく、こゝだくの罪が生れたら、天津祝詞の太祝詞を宣明せよ。然らば皇御孫命の朝庭を始めとして、天下四方の國と云ふ國の罪はみな八重雲の如く、朝の霧、夕の霧の如く吹き飛ばされ、消え失せて了ふぞ！ と云ふ祝詞であります。

『天つ宮事もちて大中臣、天つ金木を本打ち切り末打ち斷ちて、千座の置座に置き足らはして、天つ菅曾を本刈り斷ち、末刈り切りて、八針に取り群きて、天つ祝詞の太祝詞事を宣れ』

かくの如く、ひとり我國のみならず、天下の國と云ふ國の一切の罪惡を「朝の霧、夕の霧を朝風、夕風の吹き掃ふことの如く、大津邊にゐる大船を舳解き放ち、艦解き放ちて、大海原に押し放つことの如く、彼方の繁木が本を燒鎌もちて打ち

掃ふことの如く、遣る罪はあらじ」と戒ひ給ひ、清め給ふあらたかな靈驗が天つ祝詞の太祝詞にはあると云ふお示しであります。

罪と穢れは、ものがつみかさなつて、どよみ、停滞し、生成發展し飛躍し向上すべき生命（いのち）が消え、枯れ衰えた形を云ふので、そんな悲しい病的症狀を一切一掃する爲に天つ祝詞の太祝詞を宣明せよ、と云ふ御示しのころは、祝詞にみちてゐる奇異な食物に關する言葉の意味を深く體得すれば明らかに分るはづです。

頑迷單純な日本主義者は罪と穢を、戒ふ爲にはたゞ外觀的に、型的ばかり、「身そぎをせよ、齋戒沐浴せよ」と教へますし、神祕主義者や迷信家の日本精神論者はたゞ口ばかりで「大祓の祝詞を高らかに誦せばよい」と主張します。それも結構ですが、私はも一歩進んで、大祓ひの祝詞を體讀したいと思ひます。

云ひ換えれば、大祓の祝詞に従つて、罪と穢れを拂ひ清める爲には「天津のりとの太祝詞を宣明」せねばなりません。その天津のりとの太祝詞は全國民の生活原理、國民食の原則を示すものでありますから、稱え奉るだけでは、如何に大聲でも、何の役にも立ちません。『宣れ』とは宣明せよの意で、明徴せしめることです。明徴せしめるにはまづ實踐躬行せねば叶ひません。國民一人々々がこの天津御食の長御食の遠御食を躬行實踐することは即ち、天つ祝詞の太祝詞を宣明する事であり、これこそ人民・人間の生理明徴で、且つ生理的國體明徴であります。天つ祝詞の太祝詞は佛教以上に四足食を不淨食として禁忌します。こゝに深い深い皇祖皇宗の御心つかひがあるのです。神道を宣揚すと稱しつゝ、大祓を讚稱しつゝ肉食をつゞくる人々は先づこゝに猛省すべきでせう。

祝詞は身土不二『自然を生きる原則』を示す

さて、この天つ御食の長御食の遠御食を身に實踐する事が何故、もろ／＼のこ

、だく罪、穢れを清め祓ふ事になるか？ これが大きな問題であります。

天つ御食の長御食の遠御食とは伝統的な食物のことです。それは『身土不二の原則』を示すものであります。我國人は昔から論あがひする事を好みません。

敷嶋の大和の國は言靈の幸はふ國、人みなと言擧げせぬ國……

國民基本食を制定してもそれを、分析的、部分的、科學的な、固定した死んだ法則と「理屈」に表現する事を嫌つて、何處までも全體的、總體的に、物心一如的な言葉を使つて、「天つ御食」とか「長御食」とか「遠御食」とか素朴な、簡素な神々しい尊稱を奉り「實行」を教へるだけであります。

古い文獻に現はれた日本民族、皇祖皇宗の宇宙觀、世界觀は、古代支那の聖人達が發明し完成した無双原理『易』の陰陽論の如き微妙な二元可能一元論ホラリザブルモノニズムも持つてゐますし（太極、無極は天御中主命、陰陽は高皇產靈神、神皇產靈神に相當し

ます）又、近代西洋文明の中樞である科學が生み出した化學元素進化論、相對性理論、宇宙膨張説の如き新しい世界觀をも含んでゐます。然しそれが極めて素朴な簡素な形で象徴シンボリック的に示されてをり、詩化され神話化されてをり、その上數千年を経ていよいよ古色蒼然となつてゐますので、近代的、現代的科學的な、分析と分解と抽象で照らされ出すと、固定した、寫眞の様な、散文の様な、生命のない、荒唐無稽としか見えなくなるのであります。

けれども、象徴派の詩を讀む様にこの古色蒼然たる日本古代民族の生命觀、宇宙觀、世界觀を心靜かに誦して見ますと、そこに無限の深みのある、「見えざる世界」が展開し、一切の生命現象の祕密が解かれるのであります。「身土不二の原則」はその核心をなす思想であります。

身土不二の原則と云ふのは全ての生命現象即ち「身」は、「土」即ち環境の所産である、「生命は環境の所産であるからには、生命、身體、生物はその環境の變化

であり、その環境は宇宙全體に關連するものであるから、一個の生物、生命は宇宙全體の所産であり、生命が環境の所産である限り、生物は宇宙全體の法則に絶對的に支配されるのであるから「身」(生命、生物)は「土」(環境)と同一根源から成り立ち、二でなく、一である、不二であると云ふのであります。

廣義の環境は宇宙全體であり、生命はこの宇宙全體、森羅萬象の陰陽現象、盛衰消長、生成發展の大法則(即ち高皇產靈神皇產靈の御はたらき)から一步も一寸も離れる事が出来ないのみならず、狹義の環境、即ち「食物」には直接に支配され、その支配——法則を追従する自由のみは與へられてゐるけれども、それを破る時は忽ちその存在の自由を失ふと云ふのであります。即ち生物存在生命現存の理由はその生物、生命現象を許す環境の法則それ自らであると云ふのです。進化論の適者生存は、この意味から一步を進め深めて適食者生存と改訂されます。適者の意味がこれで明瞭になりませう。

佛陀が肉食を禁止し、「息肉延命」とか「殺生禁斷」の律を立て、その使徒が後世に於て「素食持戒」を固守する事を以つて道を守る根本的條件とした如き、或は一度國亡びたる猶太民族が遂に世界を經濟的に財政的に獨裁するまでに成功した祕密が三千年前のモーゼの食律を實行した事にある如きも、神道、神ながらの敷島の道を守つて、よく三千年間皇統連綿、他國の辱めを受ける事なく我々の祖先が國を盛んならしめて來る爲に不斷に齋戒沐浴、肉食を禁斷し六根を清淨ならしめて來たのと共に、全て民族の存在生成發展の原理が——食物の傳統を尊重するにある事を證明するでせう。(ローマ帝國は、ローマ市民の食物に於ける驚くべき奢侈、榮耀榮華から没落し、織田信長、木曾義仲、平家の人々が美食に漸く馴れるや否や亡びて行き、西郷隆盛が「鹽うすき汁を好む様になれば國は亡ぶ」と云つたのも、一天二刀の宮本武藏がその「獨行道」に於て「身一つに美食を嗜まず」と云ひ、芭蕉が「美味珍食にふける人は他事にふれやすきもの也、菜根を嚙

んで事をなすの語あり」と断定したのも、思ひ合はせて見ると味はひがあるので
はありませんか。

ヴェーダの聖典にも食戒があります——

「過食は高等な精神作用の敵である。天上への希望と徳との效である。……
過食は粗野な激情を誘發す……」

我國の最高道德、民族生命原理、國民發展原理、食物崇拜の精神は祝詞に、殊
に天つ祝詞の太祝詞に明らかに示されてゐますが、祭政一致の昔はそれが全國民
に洩れなく日常不斷に實行されてゐました。只今でも、神事や、皇室の最も重要
な儀式にはその面影が傳へられてゐます。

皇祖神として全國民が齊しく最大の尊敬を捧ぐる伊勢神宮に 天照大神と共に
祭り奉る豊受大神は即ち皇祖皇宗の御勅によつて定められた食物の神様ではあり

ませんか！

正食者は不老長壽

かくまで我々の祖先が食物に重きを置き、最大の關心を持ち給ふた所以は何處
にあるのですか？ 食物は國民生命の根元であります。國家の興廢はその食の有
無にかゝり、國民の病健、壽夭、強弱、大小、賢愚一つとしてその食物（狹義の
環境、廣義の環境）に依らざるなきはないからであります。

生命は食物のある處に生れる。

生命は食物より生れる。

食あり、故に生あり。

生命現象の異狀は食物の異變より來る。

即ち全ての生理的現象も、病理的現象も食物の支配を受けてゐるのであります。これを我々は否定する事が出来ないではありませんか。誰がこの嚴肅な事實を否定出来るでせう。如何に分析と解剖に巧みな科學、西洋醫學でもこの事實は否定する事も、改變する事も出来ないでせう。

食あり、故に生あり。

故に生命異變の一切は食物攝取の異常より來る。

食は狹義の環境である。食は全體の一部であり、生命はその一部の又微小分である。人間は宇宙の一小部分である。一小部分が完全に存続する爲にはその環境周囲の存在と共に行動せねばならぬ。即ち全體の一微分はその周囲の a' 、 a'' 、 a''' ……等の微分群に支持されてゐるのである。この a が a' 、 a'' 、 a''' ……等を遠く離れた他の微分群 f 、 f' 、 f'' 、 f''' 等の異分子に依らんとすれば、 a はすでに a としての存在を失ふのである。これ即ち a としての生命の破局であり、死である。

かくの如き信念領解から出發して、我國古來の食物と國民の健病、壽夭、大小、賢愚、強弱、思想との關係を大觀致しますと、仲々興味深きものが澤山あります。

神代高天ヶ原の食物は此の豊葦原瑞穂國ではなく、祖先民族の大移動以前の土地の食物であり漠々たる太古のことでありますから暫く論議を止めます。又、人皇時代に入つてからも奈良朝以前の記録は「科學的」に正確でないから、如何に長壽者が記録に残つてゐ、食物が正しかつた事が立證されても、まだ不確かですからお預りにしませう。(神武天皇より景行天皇に至らせらるまで十二代の天皇御壽平均百十二歳六)

奈良朝時代には外國文化が輸入され、衣食住共に大いに外來文化の影響を受けたのですから、これも引用出来ません。

こゝには比較的單純なその上材料が正確でまともつた例として刀鍛冶の人々を引用しませう。此の人々は殆ど一生を齋戒沐浴精進に終始した様な人々で、食物が所謂精進——神ながらの淨食——でありました。そんな神ながらの淨食を平生

攝取した人々が如何なる壽命を享けたかと云ふことを系圖によつて調べてみますと次の如きもので、長壽者が大へん多く、平均壽命も大へん長いので、我々は驚かされます——

刀劔師の平均壽命

——その系圖によりて——

相模國系圖

(名の下の數字は死没年齢なり。)

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|-----|----|----|
| 國綱 | 九三 | 國光 | 六三 | 國宗 | 九四 | 國安 | 六八 |
| 國重 | 三二 | 國泰 | 六四 | 大進房 | 一三一 | 行光 | 八七 |
| 正宗 | 八一 | 貞宗 | 五一 | 秋廣 | 八四 | 秋義 | 五九 |
| 國次 | 八一 | 金重 | 九一 | 金行 | 七三 | 國重 | 七八 |
| 兼光 | 八三 | 兼氏 | 六〇 | 廣光 | 六七 | 廣光 | 六二 |
| 義弘 | 二七 | 則重 | 七七 | 直綱 | 六九 | 長義 | 八二 |
| 左 | 八〇 | | | | | | |

計二十五人 一人平均命數七三年四二

山城平安物系圖

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 長光 | 七五 | 吉長 | 八七 | 長吉 | 七二 | 吉則 | 五三 |
| 國重 | 七八 | 國平 | 四九 | 國重 | 六〇 | 國重 | 四六 |
| 國信 | 七〇 | | | | | | |

計九人 一人平均命數七三年三三

藤原次一文字系圖

| | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|----|
| 助眞 | 一一三 | 助家 | 七八 | 家宗 | 五三 | 忠家 | 五三 |
| 家村 | 五六 | 義行 | 五六 | 吉廣 | 八四 | 廣次 | 六一 |
| 基次 | 六七 | 廣次 | 六二 | 廣次 | 五七 | 助廣 | 七八 |
| 助廣 | 六三 | 助廣 | 八五 | 助廣 | 六七 | 隆次 | 七一 |

計十六人 一人平均命數七〇年九〇

山城來一類系圖

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|-----|----|----|
| 國吉 | 五七 | 國行 | 七九 | 國俊 | 一〇五 | 國末 | 七六 |
|----|----|----|----|----|-----|----|----|

第四章 祝詞は國民生活原理なり

| | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 國次 | 七八 | 國秀 | 六五 | 秀次 | 五八 | 末行 | 五八 |
| 末次 | 五九 | 助近 | 五八 | 行眞 | 六〇 | | |

計十一人 一人平均命數六八年四五

以上の如く長壽者の多い職業が、職業柄常に精進食で、穀食を主食とし、菜食を副食としてゐた家柄であつたと云ふ事は、甚だ面白い事實であります。

刀鍛冶と共に僧侶の中にも長壽者が澤山あります。有徳の僧侶が健康で長壽を保つのは一にその「素食持戒」であらうとは普通一般に信じられてゐる處であります。或人は僧侶が長命であるのはその精神修養の結果であると申しますが、これは、少くとも佛陀や高僧の言葉によりますと全く逆で、精神的修養を行ひます爲には是非共素食菜食が必須條件で、葷酒山門を入るを禁じ、葷（なまぐさい菜根類）さへ寺には入れる事を恐れねばならないのであります。

（東洋でも西洋でも）長壽者の長壽の秘訣と云ふのは大抵お定め文句の様に食物

に關する條件を含んでゐます。（それには、屢々「樂天的であれ」、とか「始終ニコニコすべし」「細事に拘泥するなかれ」等と云ふ言葉も見受けられますが、樂天家であり、ニコニコ然として取越苦勞をしない事は健康を確保されてゐねば出來ないことで、これは健康長壽の結果の現象で、原因ではないのでせう。實際クヨク心配する人々は病人なのです。）

人間は本來穀食動物

然らば何故に我國に於ては精進食、菜食、禁肉が健康と長壽を保たしめるかと云ふと、それは、自然であるからであります。我國に於ては氣候溫暖で農作物が十二分に産します。それで我々を養つてゆくと云ふことが最も自然であります。これを生理學的に見ますと、まづ我々の齒牙の形狀が、我々の植物食動物である必然を示してゐます。動物は全てそれ／＼獨特の食物を有してゐます。そしてそ

れ、適當な獨特の歯牙口腔と消化機關を有してゐます。例へば肉食動物は犬齒と云ふ尖つた鋭い齒を澤山もつてゐます。又短い腸をもつてゐますが盲腸をもつてゐません。處が草食動物は犬齒をもたず、非常に長い腸と盲腸をもつてゐます。兎の腸や、殊に「羊腸」と云ふ熟語のある程羊の腸の如きは長いものです。

腸の長さ

虎——體長の三倍

人——體長の十一倍（但し身長は頭から龜尾までを云ふ）

羊——體長の二十倍

唾液や胃腸の消化液も草食と肉食では異つてをります。人間の齒は三十二枚の中二十枚まで臼齒で穀食に適してをります。前齒八枚は草食に適したものです。即ち三十二分ノ二十、即ち八分ノ五は穀食に、三十二分ノ八即ち八分ノ二は草食

に適してをります。残る四枚の絲切齒（犬齒に非ず）は我々が堅いものを噛み砕くのに適してをります。たまにはこれで魚や鳥を食つても悪くはないでせう。

これを云ひ換えますと、原則として人間の食物は全部草食穀食であるべきであり、その中でも穀物は野菜類の三倍位であるべきことになります。

腸の長さも、人間のは肉食動物と、草食動物の中間にあり、穀食を主とし、野菜を副とすべき動物である事を自然によつて、神によつて規定されてをります。

小鳥はその嘴の形状によつて、その食物が自然に規定されてをります。規定されてゐる以外の食物を與へると病氣になり、美しい聲でなく鳥なれば聲が悪くなつたり、鳴かなくなつたり、美しい羽根の色が悪くなつたりします。

人間以外の動物は全て各自獨特の食物を取る事を怠らず、自然に定められたものより以外のものを決して取りません。そこに彼等が人間よりも丈夫で、人間ほど病院や醫藥、手術の必要もなく、しかも人間よりもより多く天壽を完ふしてゆ

く祕密があるのではないでせうか。人間で天壽を完うするのは千人につき一人二四（昭和十年）しかありません。實際馬や牛に、小魚一匹與へて見ると、猫に小判をつきつけた程の反應もありません。牛と馬は大體同じ様なものを食つてゐる様ですが、實際彼等の好むまゝに取らせて見ますと、同じ草でもそれ／＼違つたものを取つて、各自の定められた處は越えません。

草食肉食で齒牙の形が違ふばかりでなく顎の構造運動まで異つてゐます。

肉食動物の齒は鋸牙で、圓錐形の鋭いもの、上下を合はせると鋸の齒を食ひ合はせた様で食ひ合ふ——から、横斜運動の要がありません。だから豆や穀物、草を噛みこなす事が出来ません。（「獅虎は荳蔻まめくさを食せず」——古語。）

草食動物の齒は碾（ひきうす）齒で（臼形齒ではない！）上下並列並行してゐますから、上下を合はせると其面が斜平であり、波形の隆起線があり、下顎が横斜運動すると雜草が押し潰され、引き潰される様になつてゐます。（古語に「牛馬

は鼠ねずみを食せず」）。

人間の齒の大部分は臼齒で、上下併行併列式である上に下顎は横斜運動をします。その面は周圍が高く、中央部が低く凹み、ほんとうに臼型になつてゐます。又波紋は菊座形と云ふ放射線狀によつてゐます。だから、上下を合はせると、自ら不同の扁圓形の隙間が出来、穀物の粒を噛み碎くのに自然と適してゐます。孔子が「人生穀を以つて主と爲す」と云つたのはこれを看破したのかもしれない。人間は單に肉食に適した齒牙をもたないのみか、肉食動物の特有の他動物を殺す武器をも與へられてはゐません。

人間の齒牙の形狀とその運動の形式が主として穀食に適してゐると云ふことは進化論的に見れば、人間が數萬年の昔から穀食を主としてゐたと云ふ事になりませう。云ひ換えれば、穀食によつて人間は今日の人間に到達したとも云へるでせ

う。とにかく、生理的に人間が穀食動物であると云ふ事は否定出来ないでせう。

「真に社稷の臣也」「稷は五穀の王なり」の稷は粟です。こんな言葉のあるのは昔支那で稷を國民の生命——健康——の根源とし、國家の生命原と認めてゐた事を意味するのであります。支那では粟、滿洲では高粱が日本の米の位置を占めてゐるのです。歐洲では小麥、ライ麥、大麥などが日本の米に相當します。オリンピックの元祖スバルタ人は大麥を賞美したのです。

人間が穀食動物である事は人間の消化機關が穀食に最も適してゐる點でも主張されますが、一方經濟的、營養的、農業的な見地からもこれを主張する事が出来ます。

即ち最近の西洋營養學者が主張する様に、動物性蛋白が人間に必要で最も經濟的、營養的であると云つても、その供源たる牛馬一頭を養ふには約二町五反歩の

土地が要ります。しかも、この二町五反歩を以つて養つた牛、又は馬一頭で何人の人間が生きてゆく事が出来ませう。米なれば米だけで人間に必要な養ひ分を有つてゐますが、牛、馬の肉はそれだけでは不完全です。土地の狭い日本には歐洲の様に牧畜を重んずる農業は絶対に不可能であります。豚は牛馬ほど土地を要しない、と云つても、養豚事業を大規模に經營するのが國家的な見地、營養經濟的見地からは大へん不得策である事はすでにヒンドヘーデが詳説した處です。

穀食が人間に最も經濟的であり、營養的であり、最も合理的であるのは、人類が穀物によつて生れ、生長し、今日の如き形態と精神を有するに至つたのであると云ふ證明でもありませう。

食物と金言

平素の食物がかくの如く人間に大切なものである事は古人も齊しく認めてゐる

處です。次の如き言葉はそれを證明します——

人に最も貴重なるは身體なり

第一の財産は健康なり

健康は快樂を生じ、快樂は健康を生ず

健康の維持は吾人の義務である。生理的道德と云ふものがあ

る事を知るものは稀れである

人の必要の中、最も大にして第一位なるものは食物なり

『哲學的大饗宴』で有名なプラトンの養生訓——

一、常に大麥、小麥の簡單食をとれ。

二、パン、オリブ、チーズ、ネギ、カブラ、イチジク、豆等あらば何人も高齡に達し、何人も幸福たるを得。

三、肉食せば醫者が必要となり、食物と土地不足し、従つて戦争も起り、國亡ぶべし。

——ソクラテス

——エマースン

——スペクター

——スペンサー

——ソクラテス

(註——牧畜せば二町五反歩にて牛馬僅かに一頭より養ふを得ず。米作せば二町五反歩にて四、五十人の人を養ひ得。以つて、肉食せば國土が四、五十分ノ一以下になる事推して知るべし)

ピタゴラスは攝生法によりて人を德行に教育する事を始めたり

吾が樂園は玉蜀黍と水にて足れり

人の病は皆自ら飲食を慎まざる爲に作りしもの也

汝の精神を清くし、獨立せしむる爲常識を以つて害ある食事をさげよ

然らば汝は不死永久の神の國に入るを得べし

壽は五福の第一也

飲食は人の根源也

病は飲食不調より起る。之を治するには先づ食療を以つてせよ

百病の横天多く飲食にあり。飲食の患は色慾に過ぎたり。色慾は斷つとも飲食は半日も斷つべからず

——ヤムブリヒ

——エビキュラス

——ピタゴラス

——ピタゴラス

——洪範

——周禮

——素問

——古今醫統

四、百、四、病、の、原、因、は、皆、食、に、あ、り。
 大、凡、病、は、皆、自、ら、爲、せ、し、禍、に、あ、ら、さ、る、も、の、な、し。
 四、百、四、病、宿、食、を、根、本、と、す。
 脾、胃、を、調、理、す、る、は、醫、中、の、王、道、な、り。飲、食、を、節、戒、す、る、は、却、病、の、良、方、な、り。
 衛、生、長、壽、は、口、腹、に、あ、り。

——梶原性全
 ——病家須知
 ——達生錄
 ——萬病回春
 ——盤珪禪師

以上述べた處を綜合致しますと、

- (一) 我國の最古の文獻たる祝詞は國民の生理的道德の原典である。
- (二) 大祓の祝詞はありとあらゆる罪と穢れ疾病、苦惱を一掃する爲には天津祝詞の太祝詞を宜れ、と教へるが、天津祝詞は我國民生命の根源たる國民基本食物に關する皇祖皇宗の教訓で、我國民は宜しく天孫降臨に當つて天照大神が、天つ御食を遠御食の長御食として示し給ふた齋庭の稻穂(その他の穀物)即ち自然の與へる食物を食とせよと云ふ教へである。

- (三) 神ながらの穀食をつゞけると云ふ事は即ちこの國土に於て「自然を生きる道」である。
- (四) 穀食は獨り日本人のみならず全人類の依るべき食物で、その齒牙の形狀と運動、消化器管、消化液、等はその必然性の萬古不易を語つてゐる。
- (五) 「自然を生きる」ことは即ち自給自足で國際鬭争の解消であり、却病保健、息災延命の鍵である。
- (六) 齒牙の形狀と運動より、穀食が人類の正しき主食である事が理解され皇祖皇宗の遺訓によりて、農作物を尊重することがありとあらゆる罪と穢れ(古代日本人は疾病をも罪惡視してゐる)を一掃するのは國土の自然を生きることになるから當然であるのが分る。
- (七) 自然に即して生きるものは自然な生理状態即ち健康を保つ事が出來、不自然な生理状態即ち疾病には墮ちないのが當然である。

祝詞を體得實踐せよ

これらの要點を把握して、祝詞の聖訓を實踐しようとなると、大體左の如き要領になる――

正しき食物

(一)主食――全食量の大部分(少くとも七割以上)を穀食――米、粟、稗、黍、麥等その土地の産物に依ること。

(二)副食――季節の野菜、山菜、海草、但し主食物の三分ノ一(三割位)を越えしめざること。魚肉、鳥肉、野獸等は時として之を食するも、必ず野菜の三分ノ一以下なること。

(三)調理――自然を出來得る限り傷めざること。即ち米は玄米、半搗、野菜は決して甘皮を去らず、煮こぼさず、適當なる鹽味にて用ふ。

四)禁忌――遠地の珍味異物――例へば南洋の果實、砂糖、大陸の牛豚及其の製品。馬鈴薯、トマトの如き最近の輸入舶來にかゝり、未だ我國土に馴れざるもの即ち食物の傳統を破るもの一切。

かくの如き「正しき食物」は、空間と時間の體系を破らざるものであり、その空間、その時間の産物を、その産出量に従つて攝取する自給自足經濟の原則でもあり、最高道徳でもあり、不老長壽、息災延命の食でもあります。即ちこれが「天の御食の遠御食の長御食」である所以であります。

然し、かくの如く詮じつめた要領書は一見全く餘りに平凡で、それが果して何等かの意味價值のあるものであるや否やも疑はれるのですが、自然を生きると云ふ事は要するに最も簡單なことで、人間以外の生物が全て日々實行しつゝ、人間に比べると極く低い天病死亡率を示してゐる處であります。

そもく健康を確保する爲に非常な苦心と努力が必要であると云ふことが間違つてゐるのではないでせうか。人間以外の生物で人間位、健康の爲に、苦勞してゐるものは一寸見當りません。生れると云ふ事も、生きるると云ふ事も自然な現象である以上、生きてゆく爲に、大へん特別な苦心を要する譯はないのではないでせうか。

議論を暫く擱いて、これを實行に問ひますと、第一、經濟的見地から見て以上「正しき食物」ほど優れたものはありません。第二、保健醫學的見地から見て榮養の點に於て何等否とすべきものはありません。而も第三、治療學的にはまことに驚くべき靈驗があるので、それを目撃し、體驗したものは始めて、長い間祝詞を、論語讀みの論語知らずの如くに讀んでゐた無慚さに目が醒めるのです。始めて天津祝詞の太祝詞を宣明する事が全ての罪と穢れを掃ひ清める唯一の方法で

ある事を發見します。

甚だ奇言を吐く様に思はれる方々も尠くはないでせうが、複雑微妙な精神的煩悶苦惱を、只念佛の一行によつて解決したり、或は心頭を滅却し、或は無我三昧に入る事によつて容易に解決する事が果して可能でありとすれば、肉體的異狀を自然食に歸る事によつて忽ち解消する事も出来る筈ではないでせうか。自然に歸命する事は身心の惱みを眞に抜本的に療治する唯一の方法ではないでせうか。

我々の生命は天地からうけてゐます。これは正しく養へば必ず天壽を全うする事が出来るので、貝原益軒は「養生」——正しき生命の養ひと云ふ事を萬福の根本として力説してゐます——

—— 飲食、色慾を恣にし、元氣をそこなひ、病をもとめ、生れつきたる天年を短くして早く身命を失ふこと、天地父母へ不孝の至り愚なるかな。

人となりて、此の世に生きては、ひとへに天地父母に考をつくし、……

益軒は養生とは養正であり、人の大なるものゝ道であると喝破してゐます。又養生は人生の第一義であることも云つてゐます。

——先づ古の道をかながへ、養生の術をまなんで、よく我が身を保つべし。これ人生第一の大事なり。

——人身を養ふ術を知らず、慾を恣にして身を亡ぼし、命を失ふこと愚なる至りなり、身命と私慾との輕重をよくおもふばかりで、日に一日を慎しみ、私慾の危きをおそるゝこと、深き淵にのぞむが如く、薄き氷を踏むが如くならば、

命ながくして、つひに殃わざはひなかるべし。

——しかれば道にしたがひ、身をたもちて長命なるほど、大なる福なし。

——よろづの事つとめて止まざれば必ずしるしあり。

もし養生の術をつとめまなびて、久しく行はゞ、身つよく、病よくして天年をたもち、長生を得て、久しく楽しまんこと必然のしるしあるべし。

此の理うたがふべからず。

——人の命は我にあり。天に非ず、と老子はいへり。

——飲食、色慾によりて、病の生ずるは全くわが身より出づる過なり。

これ天命に非ず、わが身のとがなり。

——身を保ち生を養ふに一字の至れる要訣あり。……畏の一字これなり。

——凡そ薬と鍼灸を用ふるは、やむ事を得ざる下策なり。飲食、色慾をつしみて……養生をよくすれば病にかゝる事なし。

——古の君子は……鍼灸湯薬を用ひずして病なし。これ君子の行ふところ、本をつとむるの法、上策なり。

——病多きはみな養生の術なきより起る。病起りて、薬を服し、いたき鍼、あつき灸をして父母より受けし遺體にきづつけ、火をつけて熱痛をこらへて

身をせめ病を療すは、はなはだ末の事、下策なり。

たとへば國ををさむるに徳をもつてすれば、民のちのづから服して亂をこらず、攻め、撃つことを用ひず、只薬と鍼灸を用ひて病をせむるは、たとへば國を治むるに徳をもちひず、下を治むる道なく、臣民うらみそむきて、亂ををこすをしづめんとて、兵を用ひて戦ふが如し。百たび戦ひて、百たび勝つとも、たつとぶべかず。

——聖人は未病を治す。未病を治すや必ず食を慎む。

——孫子が曰く、よく兵を用ふるものは、赫々の功なし。云ふこゝろは兵を用ふる上手は、あらはれたるてがらなし。いかんとなれば、兵のちこらぬさきに戦はずして勝てばなり。又曰く、古の善く勝つ者は勝ち易きに勝つと。

養生の道も亦かくの如くすべし。

——飲食の人は、人これをいやしむと。(孟子)も云へり。

以上の如き益軒の言葉を見ると、我々は養生の秘訣、不老長壽、無病息災の要が平素の食物と色慾にある事を教へられます。平素の養生法さへ守れば、病は起らぬ、と斷言されてゐます。

餘りに簡単な様でありますが、重大な事はみな簡單であります。無病息災不老長壽たゞ平素の養生にあるのみです。

平素の養生では、食物を控へ目にとればよいと云ふのです。たゞ控へ目にとるだけで、益軒の時代には十分の養生であつたのです。然し、交換經濟が發達した今日では遠地異國の珍味珍物が市井に流行し、資本主義經濟機構の下に於ける産

業は、不自然な美味をいよ／＼益々安値に提供し、人をしてしらず／＼の間に、嫌でも應でも不自然な食物を取らせてゐます。こゝに無数の病人が現はれる理由があります。

そこで、我々はこの益軒の養生法に従ひ、皇祖皇宗の教へ給ふた食物の傳統を再び取り戻し、かの平城天皇が大同醫式に於て『異邦の醫書を以て本方となすを許さず。先づ本邦の醫書を考慮して而して後、異邦の書を按ずべし』と嚴かに定められました御精神を頂いて、前記の如き「我國の正しき食物」我國の傳統的な食物を選定して攝取し、外來食物を排し、「日本人は日本食から」を標榜して行かなくてはなりません。

これを實行すれば、我が國は、始皇帝が不老長壽藥を徐福をして求めに來させた昔——當時我國の天皇聖壽は全て百歳以上でゐられた——に返るかもしれませぬ。

とにかく我々は大祓の祝詞によつて、天の祝詞を宣明し、神道の生理學の優越を明らかにする爲に先づそれを體驗實行すべきであります。

第五章 自然醫學と西洋醫學

— 神ながらの道は自然醫學の道 —

治療乃至は豫防を目的とし、症状を消滅せしむる事に没頭する西洋醫學——現代醫學は病氣を治しても病人を治さない。病を治しても人を直くしない。自然醫學は簡素な容易な方法で人を直くして、病氣にかゝらない様にする。未病を治して健康と長壽、知慧と幸福、信念、安心立命を與へる醫學である。こんな自然醫學は醫學らしい、薬くさい處がなく、平凡な生活法、健康法、信心、日常行事であるから、一寸その存在が分らない。それだから物明物化國から物々しい絢爛な機械文明が入つて來ると、忽ち無残にも踏みにじられて了つた。

けれども、ちつとも構はない。それは大自然の法、陰陽正しき道であるから何うしたつて亡びる事がない。安心して我々は治療醫學の行末を見てゐよう。その犠牲を出来るだけ少くする様に努力をしよう。

第五章 自然醫學と西洋醫學

—— 神ながらの道は自然醫學の道 ——

治療醫學から豫防醫學へ——豫防醫學から自然醫學へ

神道の生理學——天つ祝詞の太祝詞の生理學をハッキリさせる爲に、その實行價值、靈驗を現代流行西洋醫學に比較して見ませう。

神道は、私の考へる處では、人間生活の一切の行動の原則をその獨特の生理學によつて樹立してゐます。

その生理學は現代の科學的醫學の如き分析と抽象を唯一の手段とする術ではなく、反對に全體觀、大自然觀、宇宙萬有一元論に立脚した、天命・地令、人從三

合一致、天地陰陽に法り、術數に和する底の大調和建設を唯一最高の手段とする「道」であります。

西洋醫學が飽くまで人間を主とし、人間の力によつて健康と幸福を建設せんとする「人間の醫學」であるとするれば、神道醫學は飽くまで人間を没却し、自然を尊重し、人間が大自然に「歸命」する事こそ健康と幸福に最も必要であるとする「道の醫學」、「自然の醫學」——「歸命の醫學」である。

これは人間を尊重する以上に自然——神——を尊重する、大自然を尊重する事こそ人間を幸福ならしむる唯一の方法である、とする。それで、この自然第一の原則は實行甚だ容易であります。その要領は「自然を生きよ」の一句につきるのであります。甚だ入り易く、而も現代では甚だ達し難いものです。

祝詞を拜誦しますとその邊のことがよく分ります。我々の祖先は、決して病人を全て救はうとはしませんでした。平素から祝詞を誦へさせて、「自然を生きよ」

といふ事を始終教へるのでありますが、それでも病氣になつたり、病氣が治らなかつたりすると、大祓ひの祝詞で地上から掃ひ清め追ひ掃つてしまふのであります。即ち平素の正しい養生をしない様なもの、神ながらの、古き正しき食物を取つても治らない様な病人は、大祓ひや禊みそぎで此の世界から一掃して了ふのであります。自然醫學は西洋醫學とは反對に大自然の淘汰機構を妨げないでむしろ助けるのです。西洋醫學は、神の攝理——自然淘汰——で地上から追はれるものを救助しようとする様です。例へばいろ／＼な傳染病の如き、或は天然痘の如きで斃たなれるのは西洋醫學で大分救はれる様に見えます。然しその反對に結核や癌の如き不治病はドシ／＼増加して止みません。(傳染病や盲腸炎の如く現代の西洋醫學や、手術で治ると稱する程度の疾病は、實は西洋文明流行と共に増加した病氣で、いはば西洋文明の如き不自然な生活、食事から起つた病氣でありますから、よし治つたにしても一向手柄にはなりません。)

西洋醫學は、普通では生きてゆけない様な弱いもの、病弱者を、いろ／＼な施設や薬物で無理に癒して生かすから結局人間全體としては死亡率の多少に拘らず生命力の低い、體格の悪い弱劣者が多くなります。西洋醫學は個人を救はうとして人類、民族全體を弱くしつゝあるのです。神道の自然醫學は個人よりも先づ國民全體、民族、人類全體を救ふ事を第一とし、その爲には個人を犠牲にするのも嫌はないのです。淘汰される如きものは生きても社會の敗殘者落伍者となる無用の長物であるといふ強者の哲學です。

といへば大そう慘酷な醫道である様に聞へますが、實は非常に寛大な醫術であります。西洋舶來の科學的醫學は弱いもの、病弱者を色々な手段を講じて無理に生かす消極的方法でありますが、自然醫學——神道の生理學は弱きもの、病者に、弱くなつた原因——不自然なる生活、食事——を指摘し、これを訂正せしめる事

によつて強健になる方法を教へる積極的醫道であります。(強者となる方法を教へられても強者になれない様な者は當然淘汰されねばなりません。そんな人々は正しく生きる方法を守る事が出来ない様な薄志弱行家であるか、不自然な生活の耽溺者又は中毒者であつて、民族全體に有害無益な分子であります。)

又西洋醫學は如何なる病氣でも治すかの如く一般には考へられてゐるのであります。が、事實に於て、西洋醫學が確實に治しうるものは極めて少いのであります。これは驚くべき事ですが、否定する事は出来ません。森歐外博士の如きは陸軍々醫總監の身でありながら、『現代醫學は記録科學であるから』といつて、信賴されず、薬に親しまれなかつたといふ事です。

生理、解剖は西洋では微に入り細を穿つてゐる様ですが、治療に至つては頗る幼稚であります。例へば胃酸過多症には制酸劑、アルカリ性劑を與へ、酸不足症

には酸を與へ、消化不良には消化劑を與へ、微菌あるが故に殺菌劑を與へるといふ様な、驚くべき單純、幼稚な素朴さで充されてゐます。すべて對症的であつて根本的ではありません。何故酸過多が起り、何故酸不足が起つたか、何故消化不良が起つてゐるのであるか、又何故微菌の爲に浸されてゐるのであるか等の根本理由を考へないのです。

近視、遠視等の眼球屈折異狀に對し西洋醫學は單に眼鏡を與へるのみであり、何故かくの如き異狀が起つたかを起へたりその根本原因を除去したりしようとはしません。(根本原因が何處にあるかを知りもせず、知らうともしないのです。)つまり醫學は醫學である責任を放棄してゐるのであります。

藥物についても、西洋醫學で最も效果確實なるものは、キニーネ、サルプルサン、サントニン、モルヒネ、ジフテリヤ血清、等極く僅かなものであります。其

他の藥物は實に汗牛充棟でありその上、無數の新藥が日々發賣されますが、新聞雑誌の廣告中藥品の廣告が殆ど數に於て常に第一位にあるのがその、效き目のない證據であります。よく效くものなれば、そう澤山はいらないでせうし、毎日の様に新しいものが後から／＼出来る要もありません。

處が、この無數の藥物の中で十年以上その名聲を保つてゐるものは僅かに前記の如き四、五種類のみであります。その一々を検討しますと、我々は更に驚きを大きくせねばなりません。第一、キニーネはマラリヤを根治しません。その上久服連用すれば必ず恐るべき中毒症狀を來らします。第二、サルプルサンもその効果は出現の初めの時の様に賞用されません効果は少く、副作用も多く、第三、サントニンはよく利きますが、これも勿論根本治療薬ではありません。第四、モルヒネは一時的麻痺劑で、治療劑ではなく、これを濫用する事は大なる罪惡で、これを使用する事は醫術の幼稚なるを證明するものであります。第五、ジフテリヤ

血清は可成り効果が確實でありますが、これも最近歐洲諸國ではソロ／＼その聲價を失墜しつつあります。

結核や痛ばかりが現代流行醫學で不治の病ではありません。小兒下痢、癲癩、中耳炎、蓄膿症、諸種の結石症、胃潰瘍、淋病、ヘルニヤ、諸皮膚病……凡そ病氣で現代醫學に依つて完全に根治されると云ふものはありません。對症的手當や手術でその症候だけを除去する方法は澤山ありますが、それは根治でないのみならず、悪化せしめたり、より困難なる次ぎの症候を惹起したり、屢々死の轉歸をとらせたりする事さへあります。

卵巢を摘出したたり、結紮したりしてから間もなく全身に異狀を來して苦しみ通し、生きながら地獄の苦しみをして死んでゆく若い婦人や、腎臟を摘出して結核が治つた筈であるのに、直ぐ斃れる人々子宮後屈を數回手術して遂に生ける屍の如くなり苦しみにぬいて死んだ人々を私は澤山知つてゐます。

私は決して現代西洋醫學を攻撃するものではありませんが、友人アランヂー博士の『西洋醫學の没落』の譯者として、又、一九三四年巴里ヒボクラナト社發行『東洋醫學』、一九三一年巴里ヅラン社發行『東洋無双原理』の著者として知つてゐる範圍では現代西洋醫學は大へん不正確、不確實さに覆はれてゐます。

西洋醫學は眞の根本療法でなく對症療法で一時その場を糊塗する底の療法であるから小さい災の解決を繰り越し、大きな解決の出來ない様な恐るべき結果を惹き起す事になります。その上、悲しい事に、科學の根本原則に従つて、分析、専門化を無限に押しつめるので更に悲惨な出來事を招きます。

眼科、婦人科、皮膚科、耳科、咽喉科、腦神經科、精神病科……等と分裂に分裂を重ね、連絡と統一がありません。各科の専門醫は自分の受持ち病を治す事によつて他科の病氣を惹起しても一向氣にとめません。眼を治療して、腦神經病を

起したり、皮膚病を治して腎臓病を起し、蓄膿を大手術して廢人を作り、子宮や卵巣を摘出して地獄をさまよふ生ける屍を作り、屢々病氣を治して壽命を縮め、病氣が除かれると同時に生命も取り除かれた如き悲惨事が甚だ尠くないのであります。

至て極端な専門化の弊害であります。

人間は單に、眼や耳や、胃や子宮、頭や肺が各自獨立して存在し、聯合して出來てゐるのではなく、(そんなものは屍體である!) 一ケの大生命が或は眼となり耳となり、それ〴〵違つた役目をつとめてゐるのであります。何れも一ケの生命を守る爲の機關で、獨立したものは斷じてありません。だから普通の環境で或る機關に故障が現はれたら、それは他の機關にも必ず故障があり、生命の本體にもすでに故障が起つてゐるのです。だから療法は對症的である限り有害であります。

無數に藥物的、物理的療法、外科的手術がありますが、經驗ある醫師は一病を治する毎に健康を損滅する事實を正直に認めてゐます。ポストン大學教授キャノン氏の如きは夙にこの點に於て悟る處あり、『治療醫學の時代去れり。豫防醫學の時代來れり!』と十數年來主張してをります。豫防醫學は即ち養生醫學であります。この豫防醫學になりますと東洋の研究は到底西洋の追従を許しません。治療醫學に於ても西洋法は總じて對症療法であるのに東洋法は根本療法であると云ふ優越が否定出來ませんが、豫防醫學に於ては東洋が絶對優越をもつてゐると私は思ひます。

自然醫學の根本原理

皇祖皇宗の肇め給ふた日本精神の自然醫道は、言擧げせぬ法則によつて、いとも言葉少なく語られてをります。たゞ『齋庭の稻穂』を皇孫皇民の生命基本食と

せよ、と云ふ神勅と、年中行事の祭禮の祝詞に『自然を生きよ』農作物を尊重せよと云ふ教訓になつて現はれてゐるだけです。

これだけではその眞價が現代人には理解され難く、信じられませぬ。丁度「念佛のみが全ての幸福の元である」とか「孝が天下の大本である」とか云つた言葉が漠然たる印象を残すばかりである様に思はれ、人生の一步々々の指導原理をそこに見出す事が困難な様なものです。

「自然を生きる」と云ふ事をも少し具體的に説明しますと、それは萬物を創り、存続せしめらる高皇産靈、神皇産靈兩神の靈能を理解し、その御心に従つてゆくといふ事になります。この兩神は丁度「易」で云ふ陰、陽兩極の現神であります。この易の陰陽思想を藉りながら、少しこの自然醫學の根本原理を説明させよう。

古典に従へば萬有は高皇産靈神、神皇産靈神と云ふ陰陽二神によつて作り出さ

れ、その靈能によつて存在します。この二神に作り出された萬物はこの二神の命のまゝでなくては一寸も一步も生存し、行動する事は出来ないであります。が萬物の靈長である人間だけは他の全ての生物成無生物に比して問題にならない程の大きな自由を與へられてゐます。けれどもその自由は絶對的なものではなく、その限界が陰陽兩壁によつて區切られてゐて、それを越えようと忽ち異狀を起します。陰即ち神皇産靈の境界線を越えますと、陰過多の爲の異狀、陽即ち高皇産靈の境界線を越えようと陽過多の異狀が起ります。

健康と幸福はこの二神から許された境界の中に中庸を得て安住する時の身心の状態で、つまり、宇宙を形成する二種の相反する勢力、陰陽の力を取り入れて調和せしめてゐる状態であります。

萬物がこの兩勢力の分生結合體でありますから、萬物は全て陰陽何れかの性能を受け継ぎ、陽性又は陰性となつてゐます。そこで生物はその天壽を全ふする爲

には生命それ自身が陰陽の調和、動的調和、一つの交響樂の様なものでありますから各自に適した陰陽を適當に不斷に取り入れる必要があります。その陰陽攝取が何れか一方に片寄つたのが病であります。だから病を治すには失つた陰陽の調和均衡を取り戻せばよいのです。

この考へを押しつめると萬病は一元であると云ふ斷定に達します。すでに物心が不二であり身土が不二であるとすれば、萬病も勿論一元である筈です。萬病は食物として取る陰陽を身體と周圍の狀境に巧みに調和する様に取り合せば起らないもので、健康不老長壽者が常に淡泊にして簡素なる食物を攝る無學者に却つて多き事實はこれを證明してゐませう。

周の禮記に、食物にて治療をなし、國民保健衛生を司る食醫を天官に列し、疾醫よりも先きにしてあるのは我々の一考を價します。

人の命は我にあり天にあらず。——老子

——凡そ藥と鍼灸を用ふるはやむ事を得ざる下策なり。飲食、色慾をつゝしみて養生をよくすれば病にかゝる事なし。——益軒

——四百四病宿食を根本とす。——達生錄

——君子に病なく、聖人に夢なし。——素問

——古へは食を以て病を治す。——高井蘭山

——醫は先づ逆りて病源を曉り、その犯す處を知り食を以て之を治し、食療癒えざれば後始めて藥を命ぜよ。——張仲景

——されば歴代の名醫飲食を以つて調治せずと云ふ事なし。今の人藥の人を藥するを知りて、食の人を藥する事知らず。醫の道衰へたるなり！——遜真人

人間は食物によつて生きてゐる！

此の事實を正確に認識し健康も、一切の病氣も食物攝取如何に關るものである

ことを知らねばなりません。所謂醫學は單に症候を攻撃するばかりであるのに病氣を治すると稱し、自然淘汰の法則を侵し、個人の死を延期して民族人類全體の死期を早めつゝあります。我が國獨特の自然醫學は天が與ふる「正しき食物」によつて天賦の健康を獲得享受し、自然淘汰の法則を侵すことなしに、個人の健康を増大する事によつて、民族全體、人類全體の健康を増大し、身心の健康によつて人類の大平和、最高文明を建築せんとするのであります。

病氣を治すことを目的とする醫學は甚だ幼稚な低劣なものです。病氣を起らなくする醫學は進歩した優れたものです。自然醫學は病氣を未だ發せざる以前に治して了ふ聖人の道でありますから、それはもう醫學の形式を要しません。こゝに何故日本には西洋風な或は漢法風な治療醫學が生れなかつたかの理由があります。

自然醫學——神ながらの道——の國日本に支那風な或は西洋風な治療學のなかつた事こそ我が神國——自然を生きる國、自然を崇拜する國、大自然に歸命する

國民——の優越を示すものであつたのに、近視眼者流の人々が何時の世にも多いものですから、異國の絢爛な治療法が入つて來ると、その「利便」に幻惑し、「享樂」に誘惑され、それを讚美するのです。科學文明、機械文明も同様です。

然し、神國日本には常に神ながらの精神を享け繼ぐ者があつて、外國文化産物に對する尊敬が度を過ぎるとこれを戒める爲に現れました。支那文明輸入の弊害を一掃せんが爲に戰つて、平安朝の文化時代を出現せしめた人々、その總帥、桓武天皇、平城天皇（大同醫式、延喜式を見よ）、徳川時代の漢學流行を訂正せんが爲に益軒、宣長が奮然としてよく戰つた如きがそれです。

益軒は「熱き灸、痛き鍼、苦き藥を以て身體を苦しむるは下策なり。何ぞ古人の無病息災不老長壽法の如き簡單なるを學ばざる」と教へて倦む事がなかつたし宣長は、神國日本の「神」と健康の關係を喝破して世人を覺醒する爲に常に次の如き歌を示した——

たなつ物もの、木草も天てらす日の大神のめぐみえてこそ
朝よひに物くふごとに豊宇氣の神のめぐみを思へ世のひと

天地の神のめぐみしなかりせば一日一夜もありえてまじや

すめらぎに神のよさせる御としをし飽までたべてあるが樂しき

(御としをしは穀物をの意なり)

竈の火のけがれゆいしも家内は火しけがるれば禍おこるもの

(火を汚す、とは黄泉戸喫の如く異國の異物を煮て食ふことを云ふ)

あなかしこよもつへぐひの禍よりぞもろくの禍おこりそめける

宣長は神ながらの道に徹してゐたから、もろくの禍わざわひの根原が「火の
けがれ」から起つた時を直感してゐたのです。そして、ともかくにも朝に夕に
飯くふ毎に豊受大神の御丹精を思ふことから、神ながらの道を神世へ逆のぼり、

神々の勅(天地大自然の生命の法則)を念へと教へるのです。

凡そ日本人たるものは先づ何をいっても第一に神ながらの道に徹しなくてはな
りません。これが出来てゐないと異國の文物に幻惑し、利便と享樂に沈没して、
遂には神ながらの道を軽んじたり、そしつたりする様になるのです。

奇すはしきことわりしらずて漢人の物のことわりとくがはかなさ —— 宣長

この歌の「漢人」を、西人、英人、米人、佛人、獨人或は外人と入れ替へると丁
度現代の世相に當てはまります。

現代日本を見渡しますと、日本精神復興時代の觀がありますが、不思議にも尊
皇攘夷を叫びつゝ西洋文明だけは尊重した明治維新當時の如く、西洋文明の神經
中樞である科學に對しては何人も眞劍に攻撃をしてをりません。科學については

神道家や國學者でさへ沈黙して全くそしらぬ顔をし、軍人も、政治家も、教育家も、全ての指導者階級は擧つて讚美に走つてゐます。

宣長がゐたらどんなに口惜く、悲しく思ふ事でせう。分析、専門化、顯微鏡、抽象を以て天地自然、人生、世界の現象を見極め説き明かさうとする科學こそは、全一觀、宇宙觀、陰陽觀を以て没我、物心一如、身土不二の世界觀を樹立する唯一最大の妨害であります。

我々はまづ全一觀を確立した後、分析と抽象の方向と限界を規定し、訂正すべきであります。分析と抽象と綜合によつて完全な世界像を作り、生活原理を定めるのは本末顛倒です。我々は科學を取り入れても、科學に囚はれてはなりません。科學を訂正し、世界の平和の爲、人類の最高文明建設の爲に自在に使驅せねばなりません。これに溺れると悲惨な事——禍ごと——が續出します。

例へば、個人の私利私慾の爲或は享樂の爲に科學を濫用する事が結局民族全體

の衰滅を來す如きです。西洋生理學は卵巢から排卵する事が妊娠の原因である事を知りました。そして何等かの個人的理由の爲に、個人が避妊を希望する時にはこの卵巢の輸卵管を結紮します。かくてこの個人は妊娠の大役を拒絶する事に成功し、分娩の苦痛を免れ、性慾を享樂のみして、その當然の結果たる勞務を避ける事が出來ます。かくの如き手術はこの個人を享樂させ満足させるでせうか、民族全體を衰弱劣化することは免れないでせう。その上、かくの如き手術をうけたものは數ヶ月又は數ヶ年後に全身心に異狀を來し、多く悲惨な苦しい最後を遂げます。

この手術と同一のことが毎日あらゆる大病院で行はれてゐるのです。胃病にはたゞ胃藥を與へ、蓄膿はたゞ膿をとり、中耳炎はたゞ耳を掃除し、近眼には只ガラスを貼りつけ、虚弱兒童には保護を加へ、傳染病には豫防注射を與へ、……激痛は一切モルヒネ等の痲藥にて一時を忘れしめ、その意義根源をゴマカシ、凡そ

健全なる身體を作るとは正反對の方法に没頭し、自然良能の作用を振興せしめず却つて怠惰、衰弱、低劣ならしめるか、虚弱者、劣者を無理に防護し、民族の生命を低下せしめつゝあるのであります。

現在我が國の壯丁の四〇%が丙丁種であると云ふ事實は實に明治以來横行せる西洋衛生學醫學、榮養學の罪過ではありませんか。又軍隊が所謂軍隊病即ち胸部疾患に脅され、歴代陸軍大臣をして國民健康増進の急務を絶叫せしめるのも、現代流行醫學の低能を證するに足るものではありませんか。

我國の二十歳の青年の死亡率は人口一萬につき九八八人（女子は一〇六人）と云ふ驚くべき數字を示してゐます。英、米、獨、佛、伊、瑞等のそれは、總じて三四十%も低く、（英三八人、米五〇人、獨四三人、佛六四人、……濠洲の如きは僅かに二八人!!!）殆ど比較にならない位日本青年は總體として病弱であります。これは由々しき一大事ではありませんか。

我國民に取つて由々しき大事は一つではありません。我國民の生命は明治以來西洋文明舶來此の方蝕まれてゐます。肉體がすでに痛ましい程侵され、壯丁の半分以上が國防第一線に立つ事が出来ない人間になつてゐるばかりでなく、身體は強健だが精神が蝕ばれてゐる青年が少くとも十萬位はゐるであらうと推定されます。みくにの守りはこれでも安全でせうか？

搗て、加へて、青年の中に過激危険な思想に感染してゐるのが無數にあります。あゝ、これでも我が國の將來は安泰と云へるでせうか。

青年の死亡率に於て、結核患者及其の死亡數に於て、殆ど世界第一位を占め、青年の大半が丙丁種であると云ふ我國の現状を我々は正確に認識し、そこに西洋醫學が我國土には適應せざりし事情を明かにし、別に日本醫學樹立の必要を自覺せねばなるまいと、私は思ひます。

祝詞の生活法を實行せよ

それについて、我々が先づ第一に實行すべきは祝詞に現はれた生活法であります。祝詞の生理學は西洋生理學の肉體的、局部的、消極的なるに反し、つねにみそぎを以て身心を清淨且つ剛健ならしめ、齋戒沐浴以て身土不二の原則を實踐せしめ、天津祝詞のふとのりとを國民全體に體得體驗せしめるのであります。

我々は、宜しく祝詞の生活法を日々實行すべきであります。

一定の祭日、一定の場所を定めてまるで薬でも飲む如く祝詞を稱へる事は全く形式に墮して精神を忘れた事であります。我々は常住座臥、寸時も祝詞に現はれた國民生活原理——穀食の本義——を忘れてはなりません。祝詞の生理學は我國民の基本食が七割まで穀食でなくてはならぬ事、残り三割の副食は草食で、時として魚、鳥は忌まざるも出来る丈は少くせよと教へてゐるのです。だから祝詞

は拜誦する丈けで實行せねば無意味であり、實行しても、月に一度か、二度では無意義であります。

神ながらの昔に歸れ！

穀食菜食の昔に歸れ。

自然食の昔に歸れ。

齋鏡、齊穗の神勅を守れ。

内地に於ては玄米、半搗米を常食主食とせよ。

口腹の慾を享樂の對象とする事を止めよ。

所謂飲食の徒となる事勿れ。

神ながらの昔に歸れ！

かくの如き神ながらの生活法を試みる時我々はかの元龜天正の頃日本を訪問し

たフランソワ、ザクヴィエー師の驚きを再びするであらう。彼の紀行には當時の玄米食日本人の強健質實忍耐等が特筆大書されてゐる『日本人は身體長大にして張健快活、禮儀正しく、父母を尊敬し、名譽を重んじ、義に勇み、實踐躬行し、武術を練り、勇猛耐忍、喜怒色に顯さず、寒暑飢渴に耐へ、勤務に倦まず、貪慾を嫌ひ、盜竊を憎み、不正を好まず、玄米を常食し、牛馬羊豚を食せず、蓆上着衣の儘臥して非常時の備をなす等、誠に世界無比の理想人なり』

此頃の日本には西洋醫學も榮養學もなかつたのであります。その身心の健全さ快活さ、忍耐力の強さを我々はその當時の如き質素な神ながらのを食しものを取る事によつて再び取り戻す事が出来る筈です。秀吉が高尾山で食つた名高い御馳走は割麥粥であつたし、清正の家憲第一條に「米は玄米たるべし」とありました

我々は、先づ度々勅令によつて禁じられた家畜食を廢止すべきです。次に正成も、時宗も、秀吉さへも、又白石、益軒、宣長等が嘗めし事なき砂糖の常食を斷然廢すべきです。

糗（麥）を食ひ

草（櫟實）を食へ共

虞舜は健康を害せず、

酒を惡しみ、草を食へ共

夏禹は害されず、

蔬食、菜羹孔子を害せず……

糖分は人體に必要であるとして西洋醫學、榮養學は日本國民に砂糖を大いに食ふべしと獎勵したが、その害たるや實に恐るべきものであります。此頃一部の醫

師は肉、玉子食を餘り患者に奨励しなくなりました、何れは全ての醫師がすゝめなくなるでせう。數十年の間それを大いに奨励し、普及に努力した事はケロリと忘れた様な顔をするのでせう。栄養學說にしても所謂三大滋養分説時代の幼稚低能から今日のビタミン説時代まで思へば大へんな變り方です。醫學者醫師の滋養食にもあれ栄養學者の學說にもあれ、僅か二、三十年の間に大きな變革を來すのです。それ程未完成なのですから、かくの如き科學を以て數千年來の國民食を訂正改造することは大いに慎重を缺くものとせねばなりません。

祖先の神ながらの生活法

彼等西洋醫學、營養學者の云ふ處の如く、人間が動物性蛋白をしかく必要としカルシウムを補給せねば玄米食が完全でなかつたものであり、砂糖を一日に數十瓦使用せねば健康が確立しないものであるとすれば、そんなものが一切なく、

そんな事が到底不可能であつた我國往昔の聖人、君子、高僧、偉人、英雄、豪傑等は何によつて食養せられたものであらうか？

元龜、天正の頃ばかりでなく、更に二、三百年逆つて見ますと我々の祖先は益々素食であつたのです。

七百年前の我々の祖先は一般に次の如き質素な剛健な食事をとつてゐました。

常食——粟飯、麥飯、赤飯、稗飯の二食（僧侶は朝食のみで一日一食）取りわけ、武人の食物は質素でした。しかも、その頃は何かにつけて不便で、體力勞力を要する事は今日の數倍數十倍であつたでせう。その質素さとその勞働の激しさは今日では迎も思ひも眞似も及びません。北條時頼は執權の職にゐて食は、二味をかさねないと云ふのでしたから一般が思ひやられませう。或日、平の宣時がこの最明寺入道の宅へよばれました。その時入道は銚子にかはらけをそへて、持ち出で「此の酒を一人で飲もうと思つたが、もの淋しいのでよんだのだ。肴はないが、

何かその邊にあらう」と云ふので宣時が手觸をつけて探して見ると臺所のすみに、小皿に味噌が少しあつた。「これでよからう」と云ふので二人は夜半までも心よく飲んで歡をつくしたと云ふ事が徒然草にかいてある。こんな事は澤山ある。戦時の食は糲と餅に鹽でした。大臣大饗の指圖を見ても

菓子——餅、伏菟餅、大甘子、小甘子、橘、栗、乾柿

干物——鮑、干鳥、そわり、並鯛、すしき、さけ、焼蛸、大海老

生物——鯉、鮪、あゆ、並煮鹽あゆ、雉、ます、すしき、鯛、蛸

何と云ふも粗末でせう。これが榮華を極めた大臣の邸の山海の珍味でした。酒と云つても黒酒、白酒と云つて、濁酒です。禁肉禁酒の勅令は度々出てゐます。最近の西洋風な大宴會に比べると何と云ふ大きな相違がある事ですか。それこそ山海の珍味と内外の美酒を盛り、アイスクリームをなめて、シャンペン抜き、ダンスに終る、デカダン——ローマ帝國末期を思はせられるではありませんか。

シャンペンをぬくことダンスを學ぶことが外交官の第一課だと云ふのは眞實でせうか？

毎日少くとも一回は（多いときは三回も）西洋料理を食ふと云ふ日本精神の唱導者がある時代です。學者が米の飯よりもパン食を教へ、東京邊の小學生の大部分がパンとジャムで晝をする時代です。私には良寛や芭蕉や親鸞やの世界が思はれて仕方がない。

芭蕉行脚の掟

——一宿をなすとも故なきに再宿すべからず。樹下石上に伏すとも、

あたゝめたるむしろと思ふべし。

——魚鳥獸の肉を好んでくふべからず。美味珍食にふける人は、他事にふれやすきもの也。菜根を咬んで事をなすべき語を思ふべし。

——一宿一飯の主をもおろそかに思ふべからず。

——好んで酒を飲むべからず。……幽亂祀歳の戒祭に醕(もろみ)を用ふるも酔るを憎んで也。酒に遠ざかるの訓あり。慎むべきこと也。

會式——諸禮停止 出會遠近 但聲先月美一句

又日——龜食龜菜あるにまかせよ。酒亂に及ぶ事なかれ。

×

良寛はりませ屏風

草木をうえ、にはをそうぢし、水をはこび、石をうつすべし。

あぶらこき、さかな くふべからずあぶらもの くふべからず、
つねに淡きものを くふべし。

大食すべからかず。

みにすぎたこと すべからず

おこたるべからず。

ものをかたことにすべからず。

ほとけに 花を そなふべし。

×

こんな静寂と簡素に充ちた世界の住人でなくては、しきしまのみちと云はれ、明治天皇によりて國民のみちとして普及された短歌は出来ないので。敷島の國に生れながら、敷島の道に親しめない様な人々は、あぶらこきものを食ひ西洋食に親しみ過ぎた爲に猛獸の如く近視になつて、この静かな、簡素な、優雅な幽かな心の世界を見る事が出来ないのでせう。哀れむべき國籍亡失者よ！

質實簡素な剛健食を取つた日本人を見る爲には、態々、元龜天正や平安朝まで

上つて古文獻を涉らずとも徳川時代にも、明治維新前後にも澤山あります。

——美味は月に兩三度頂けばよろし　家　康

(その美味がどんなものだつたか、殆ど諸君の想像は及びません)

二代將軍秀忠の時、大名連の御賄は蕪汁オロシ大根、あらめ、煮物、干物でありました。

三代將軍の質素はまた格別なもので、

——町人百姓は白米を食むことを許さず。よろしく雜穀を食むべし。

小笠原實記の『山海の珍味』は『ワラビ、梅干、くらげ』だから感心します。

直江山城守は三十萬石の大身でありながらも『朝餉は鹽にて事足りぬ』と書いてあります。

井伊直孝も家訓に「飯は黒米」と定め。大老井伊はのり巻き焼餅を登城の辨當にしてゐました。

隆盛は

『きらずの汁に芋飯食訓致し候處難澁にも御座なく落着は仕易き物に御座候』とかいてゐます。松蔭は大石良雄に倣つて、幽囚の身となるや金子重輔と共に相戒めて、美味を一切固辭しました。

明治の初め、スマイルズの「西國立志編」が譯されると、三田蓀光はその序に「夷の國の人の間にも、かく心ざま優れしものあるか」

と書いてゐますが、自分等は鹽汁や、みそ汁や、澤庵ばかりで麥めしをくつてゐたのですから面白いではありませんか。

村正淡路守は米國旅行日記に

「此國の人々は元首を入札にて相定め候」

などとかいてすましてゐます。昔の人々は皆、祖先傳來の素食を恥しがつたり、西洋食を讚美したりした様な様子がありません。

西洋文明直輸入の急先鋒・福澤諭吉も、學生時代には澤庵辨當で有名でしたから、あれだけの事をしたのでせう。

明治十年新潟縣に 明治天皇が行幸ありし時、高田の町のいとも粗末な（只今の圖書館の一室にあり、ゆきて拜觀されよ）、室におとまりになりました。その時南魚沼郡の村民一同が熊を狩つてその肉を無上の珍味として献上致しました。ところが何でも大抵のものは御嘉納になる陛下が

『これは猛獸の肉である。帝王の食ではない』と仰せられてお下げになつたと云ふ事です。

現代は如何!!!

東京市民は一日に牛馬豚合はせて一千頭以上——一萬八千貫の肉を食ひます。魚は七十五萬キログラム!!!

正成も清正も嘗めた事もなかつた様な砂糖を今日、日本全體で一ケ年に約一億五千萬圓消費します。美味珍食の爲に毎年三十五億以上の金が浪費されてゐるのです。この暴用の報ひが今日の「病弱日本」であります。全ては西洋交換經濟、資本主義經濟機構、享樂主義の輸入流行と、西洋醫學、營養學の低能劣悪なる知識の崇拜、普及によります。我國民はかくて全て神ながらの國の國民である資格を喪失しつゝあります。大被ひで被はれて行く様な人ばかりになつてゐるのです。神國日本が世界最大の病人國と化してゐます。

我々は、も一度、こゝで前米國大統領グラント將軍が明治十二年に 明治天皇に奉呈したお別れの言葉を味はつて見たいと思ひます。グラント將軍はすでに今日の西洋化日本を先見してゐたのです。

前米大統領グラント將軍の進言

「嗚呼盛なる哉大日本、天皇陛下祖宗の鴻業を繼承せられ、皇統連綿として二千五百三十餘年を歴たり、徳澤の人心に浹洽する何ぞ其れ久しきや。「グラント」自國に在りて既に文聞き、今來たつて始めて其實を目撃し、以て國體の然るべき所以を知る。殊に大嘗會の祭典の如きは宇内絶美と稱すべし、其れ、陛下御身親ら耕して新穀を採り、皇后は御身親ら蠶して神衣を製し、以て皇祖皇宗に奉り、且つ自ら祿穡の艱難を試み給ふの典に至りては、万國共に比類を見ざる所なり。陛下厚く聖意を此に留められ如斯舊典古式は叨りに改め賜ふ事勿れ「グラント」又以爲く、凡そ國家の禍は其の他邦の文物を取り、人種を移し、固有の法度を變ずるの際に多く胚胎する事あり。今や貴國は其の機に臨めり。陛下深く之を鑑み賜ひて、輕々しく他邦の文物を採用し固有の法度を容易に變革し賜ふ事勿れ。又他邦の文物を擲する事勿れ能く人智の發達と國力増進を見て取捨折衷し賜ふ可し（中略）。

此の「グラント」が名残りの忠言なる貴國素より天神天祖の遺訓あり、加ふるに陛下の賢明なる何ぞ「グラント」の鄙言を俟たん。然れ共「グラント」馬齡加はり。事に感觸する事尠ならず。久しく政治の樞機を握て夙く是等の經驗あり。知りて謂はざるは忠を缺く、今將に遠く別れんとす「グラント」頻りに婆心に堪へず、敢て不肖を顧みず斯に是を絮陳し、以て別れを告げ奉る。』

む
す
び

むすび

我が敷嶋の瑞穂の國の國民は我々の祖先が『齋庭の神勅』によつて規定された『天の御食』を三千年間『長御食の遠御食』として國民生活原理として遵守して來た事實、それによつて、我々の祖先が剛健なる身心を養成し、以て宇内に冠絶せる國體を守つて來た、事實を今一度深く考へねばならないのではないか。

此の「齋庭の神勅」及び祝詞、及び神道の掟は穀食菜食を我皇國々民食とすべき事を訓へてゐる。この皇祖皇宗の訓は三千年來農業民族たる我國民によつて奉持されて來たが、明治以來西洋文物輸入流行と共に、西洋民族——牧畜遊獵民族の子孫——の肉食乳食の美食珍食が普及し、食物の傳統は正に亡びんとしてゐる。歴史傳統を失へる國民は亡ぶと云はれてゐるが、もし眞なりとせば、國民食の傳

統を失ふ事は由々しき一大事であり、實にこれより大なる禍はあるまい。

そのかみ、不老長壽の國と呼ばれた我國が今や世界第一流の病弱國となつてゐる。實に大なる禍である。壯丁の大半がすでに丙丁種であつて國の固めの役には立たぬものとなつてゐる。實に慨嘆すべき事實ではないか。

これは國難である。生理的國難である。

建國三千年、壯丁の大半が戦はずしてすでに破れ傷ける如き悲惨事は未曾有である。

しかも我國は東西文明を綜合し、世界の和平を確立し、人類最高文明を建設し八紘一字の御理想に慕進すべき運命を有つてゐる。

我々はこゝで「齋庭の神勅」——國民生活原理を體得し、體現する爲に三千年來祖先が實行して一日も怠らざりし皇國傳統食養道に復歸すべきである。

天つ御食を遠御食の長御食として拜領する傳統は三千年間我が國をして朝日の

豊坂登りに彌々榮へしめて來たのである。

完全なる穀食——それが我皇祖皇宗の示された國民食である。それこそ我々の祖先が三千年間實行して來た處である。三千年の試験濟み證明付きである。

それを我々が實行するのに何人の干涉や抗議を受ける要があらう。

西洋醫學や營養學は歐洲に於ても生誕後未だ日尙淺きのみならず、我が國土に於ては試験濟みとならざるものである。それらによつて、我國三千年間の試験濟み國民食が如何なる訂正と改造を受ける事が可能であらうか。

否、西洋醫學や營養學は却つてその根據たる西洋科學と共に部分的、専門的、顯微鏡的、抽象的の學術として、東洋及び我國獨特の全體的、全機的、天地陰陽の原理、無双原理「易」、物心一如觀から當然多くの訂正と指導を受けるべき運命をもつてゐるのである。

我々の祖先は三千年間、齋庭の神勅を遵守し、體驗し、以つて我が國體を世界無比たらしめる事に立派に成功して來たのである。その子孫たる我々が稽古して以つて愈々國體の精華を世界に發揚せしめる事が出来る様な體格、體力、心力を獲得し、養ひ得なかつたならば、我々は不忠不孝の不肖の子である。潔く病魔の餌となるべきである。

それは自然醫學である。

それが神ながらの道である。

神ながらの道とは架空の道ではない。それは大地である。大地と太陽と人間を神と人間を直接に結びつける唯一の「くさび」であり「むすび」である宇迦之御魂——稻——を崇拜し、愛慕し、天つ御食の長御食の遠御食と讚美し、嚴かに齋ひまつる道である。それは空想的な概念的な宗教ではない。

神ながらの道とは論議、演説すべき道ではない。それは實行の大道である。

神ながらの道は不言實行の道である。それは言擧げを忌む道である。

高らかに大祓ひ祝詞を宣れ。而してもろくの罪と穢を掃ふ爲には大祓の祝詞の示す如く天つ祝詞を宣れ。天津祝詞は只、口先きで稱し奉るだけでは所謂論語よみの論語知らずである。祝詞を宣れ、とは身を以つて祝詞に示された皇祖皇宗の生活原理——身土不二、穀食菜食、四足不淨禁斷——を體驗せよ、體現せよと云ふ意味である。

神ながらの道は實行、體驗以外にない。その實行や體驗は、月に一回や二回、年に一回や二回の試みであつてはならぬ。神ながらの道——「齋庭の神勅」の奉齋——は日々の「行」の道である。一日たりとも離るべからざる生命の道である。

日々「行」して尙且つ及ばざるを畏れ、六月十二月に大祓ひをうけて、怠倦を一掃し脱線を戒めるのである。

神ながらの國民基本食、神ながらの國民生活原理、それを失念し或は無視しては如何なる日本精神運動も成立しない。全ての日本精神運動に携る人々よ、全ての日本人よ、神ながらの日本食に歸れ。然らざれば諸君の運動は必ず天譴を蒙つて失敗する。

先づ神ながらの日本食に歸れ！ 食ひ改めよ。然らば全ては解決される。日本精神を失へる日本人も神ながらの日本食を取れば忽ち日本精神によみがへるのである。

皇孫の御さとしにまつろはぬ人々にも惱める者にも、病める者にも、神ながらの身土不二食、齋庭の稻穂を興へよ。彼等は忽ち救はれる。神ながらの食しもの道、これこそ神を祭る眞精神のこめられた唯一の手ぶりである。

我が國は神の末なり神まつる昔の手ぶり忘るなゆめ

明治天皇

自然醫學は神道の蒼然たる古色と甚だ原始的な簡素につままれてゐる。

けれども自然醫學は治療醫學の完成即ち、(又は)放棄の後に樹立される豫防醫學の理想とするものである。それは豫防効果が完全であるから、治療醫學が不要である。完全なる豫防醫學は更らに健康を自然に、何等の作爲努力、苦心なくして作る醫學——道——に展開せねばならぬ。健康を自然に作り出す醫學はも早や、豫防醫學を蟬脱してゐる。

治療醫學を完成し、豫防醫學に移り、豫防醫學を大成して遂に醫學の要なき健康學の域に達し、更に廣く全世界に共通の生活原理——身土不二の原則——に達したものが自然醫學であつて、それはもう、醫學臭味、藥臭を有せず、自然そのもの、如き靜寂と簡素、悠久永遠、雄渾、浩然の氣に充たされてゐる。

それはたゞ行くだけで、全ての身心の苦しみと悩みを雲散霧消せしめる。それは無碍の大道である。それは無畏と自由の世界である。

自然醫學は治療醫學と豫防醫學を無用であるとするのであるから、それはそれ自ら應病與藥、靈驗甚だ著明なるものがある。その治療學は本書では詳述する事が出来ぬ。治療學に興味を有せらるゝ方は拙著「東洋醫學」(佛文)や、「食養療法」(邦文、四卷)を参照されたい。全ての肉體の病は神ながらの食養に歸る事によつて一掃される、神の道食養に歸りても癒えない様な病人はもう生きる資格を剝奪された人間である。潔く神の裁きに服すべきである。神が死刑を宣言されたものを何うして人間の醫學で救ふことが出来よう。現代の治療醫學は死期を少しく延期することが出来る様に思つてゐる人もあるが大きな間違ひだ。百年生きるものを五十年で斃れさせてをいて、一時間か一日最期を延期した處が何にならう?!

x

自然醫學としての神道を論議せんとする人々は、先づ齋庭の神勅、天つ祝詞の太祝詞によつて嚴かに定められたる皇國々民食養原理を本書一〇一頁に示すが如き要領によつて、少くとも六ヶ月實行、體驗せよ。然らざれば一切の論議は無用である。

室町時代の華美を茶道の簡素が救つた如く、昭和の奢侈輕薄——美食珍食を、神ながらの道の質實剛健で救はねばならぬ。神ながらの道は何よりも先づ實行の道である。

神世ながらの簡素、質實なる食に歸り、祝詞の精神を、そのまゝこの現し身に生くる事によつて、我々は國體の精華を愈々世界に發揚すべきである。八紘一宇を世に宣明すべき秋は來た。

禊みそぎの荒行が自然淘汰機構を助け、強者の世界を實現する條件であることと、大被おほひの祝詞の、「天つ祝詞の太たのりりとを宣明すること」は即ち「天つ御食の遠御食」を長御食とすることであり、それが全ての罪と穢れを一掃し人間を幸福に直ただく正しく朗らかに強く生きさせる唯一の方法である事を、日本人も異國の人々も領解せねばならない。

附録 第一

伊 勢 参 り

伊勢参り

豪雨を突いて東京を出発したのであるが、汽車の中で醒めて見ると、神風の伊勢路は日本晴れである。

同行四人——岡本利吉先生、齋藤信吉氏、久留弘三氏、小生——は鳥羽驛で縣會議員小木間氏の出迎ひをうけ、暫時會談の後、外宮に参拜。室井先生傳授の古式参拜の作法によつて御禮。

敬神教育會發行『参宮讀本』には大体次の如く外宮を説明してある。

豊受大神宮

「内宮の御創立から四百八十一年を経て第二十一代雄略天皇の二十二年（紀元一千百三十八年）に外宮が御鎮座あそばされたのである。外宮の大神は豊受大神と申し上げます。此の大神は内宮の天照大神があがめてみられた神様であつて、お米や、養蠶や一般農工の神様であるばかりでなく、人間の住居の神としても祀られた神様でありますから、衣、食、住即ち國民生活の指導原理のまことに有難い大神で在らせられる。それで天照大神はあつく崇敬せられてゐたのでありますから、天孫降臨以後に於いても天照大神の御神体と共に此の大神も代々宮中で陞